

## 3月12日のコンサート『動き、舞踊、動作』の写真



最初に演奏された 浅香 満作曲 ÔDDECH ŻYCIE～序章の舞台



橘川 琢作曲 「春告花・三景」の舞台



小西徹郎の自作自演



高橋雅光作曲 独奏尺八の為の - 悲 - 坂田誠山 (尺八) / 清水フミヒト (舞踊)



高橋通作曲 『春雪夢浮橋』 高橋 通（一絃琴）／天野美和子（舞踊）



清道洋一作曲 『革命幻想歌』の舞台



助川敏弥作曲 『独奏十七弦による三章』 池上亜佐佳（十七弦）／花崎さみ八（舞踊）

# 音楽の世界

## 目次

<b>グラビア</b>	動き、動作、所作と音楽		
<b>論壇</b>	若い音楽家の方々へ	中島 洋一	4
<b>特集</b>	10回目を迎えたFresh Concert		
	Fresh Concert CMDJ」、第10回を迎えて	助川 敏弥	6
	コンサートへの期待	吉田 泰輔	7
	フレッシュコンサート 10周年に思う	西山 淑子	7
	フレッシュコンサート 10年に	高島 和義	8
	Fresh Concert -CMDJ2012-の出演者に訊く！		9
	過去の出演者からのメッセージ		16
<b>長期連載</b>			
	<b>音・雑記一ひなの里通信一</b> (47) . . . . .	狭間 壮	20
	<b>名曲喫茶の片隅から</b> (28) . . . . .	宮本 英世	22
	<b>音盤奇譚</b> (33) . . . . .	板倉 重雄	24
<b>海外レポート</b>	アペカ電子オルガンコンペティションにみる中国	阿方 俊	26
<b>インタビュー</b>	ベートーヴェン・ソナタ全曲演奏に挑む 北川暁子	編集部	28
<b>コンサート・レビュー</b>	北川暁子ピアノリサイタル	北條 直彦	32
<b>コンサート評</b>	動き、舞踊、所作と音楽	国枝 たか子	34
<b>コンサート・レポート</b>	動き、動作、所作と音楽	実行委員長	38
<b>短期連載</b>			
	現代音楽見聞記(14)	西 耕一	39
	福島日記(9)	小西 徹郎	40
<b>コンサート・プログラム</b>			
	<b>Fresh Concert CMDJ 2012</b>		42
	<b>作曲部会作品展</b>		54
	CMDJ 会と会員の情報		64
			3

今年、日本音楽舞踊会議にとって、創立 50 周年の年に当たります。また、2003 年に第 1 回が開催され、毎年続けられている「Fresh Concert CMDJ」にとっても、10 回目の節目の年となります。50 年前というと、私はまだ音楽大学の学生で、日本音楽舞踊会議という音楽文化団体の存在すら知りませんでした。この半世紀の間に世界も、日本も大きく変わりました。世界の歴史を見渡すと、人類初の月面旅行、ベトナム戦争、ソビエトと東ヨーロッパ諸国の社会主義体制の解体など、我が国では、学園紛争、高度経済成長、バブルの崩壊、オウム真理教事件、阪神大震災、そして今年の東日本大震災など、色々大きな出来事がありました。どの出来事が強く思い起こされるかは、それぞれの人によって異なるでしょうが、日常的な存在となり、あまり意識しなくなったパソコン、携帯電話やインターネットの普及なども、我々の生活を大きく変える要因になっているのかもしれない。若い方々の記憶のページは、せいぜい四半世紀分が書き込まれただけでしょうが、私のような年配者となると、半世紀を遥かに超える記憶が書き込まれています。その一コマ一コマを思い起こしてみれば、世の中全体の出来事だけでなく、自分自身の身の回りに起こった出来事も色々と蘇って来るのですが、それでも、自分が過ごして来た時間がそう長くはなかったような気がしてしまうのです。

「Fresh Concert CMDJ」も 10 年経つのに、第一回目の出演者の方々の顔やお名前がついこの間のことのように浮かんで来ます。10 年前に青年だった方は、今は立派な壮年になられている筈です。どうも年を重ねるにつれ、時間が短く感じられて来るようです。トーマス・マンだったでしょうか、「楽しく充実した時間は、その時はほんの瞬間に感じて、後で思い起こすと長く、退屈な時間はその時はたまたま長く感じられても後で思い起こすと短く感じられる。」と言っていたような気がします。私は時間を浪費して、年を取ってしまったのかもしれませんが、失った時間はもう取り戻せません。この後どれだけ生きられるか判りませんが、とにかく、前を見ながら、やりたいこと、やり残したことを、自分が出来るまでやり続けようと考えています。

若い人たちは、時間という財産をまだ沢山持っています。羨ましく思いますが、その財産は油断していると、意外に早く消費してしまうものなのです。どうか、充実した時間を過ごしていただきたいと存じます。

昔、先輩の先生と学生の創作オペラサークルを指導したことがあります。学生達はのんびりしていたし、作品はかなり難しいので、ちょっと無理じゃないかという気がしたのですが、公演が一ヶ月後に迫った頃、部長から「学生だけで話し合いたいので先生方は席を外して欲しい」という申し出がありました。話し合いの後、先生方に対して批判や、注文が出て来るだろうと覚悟していましたが、そうではなく「ここまで来たのだから公演に向けて全力投球しよう」と話し合ったようです。それからの一ヶ月、学生達はそれまでと違い、猛練習にも耐え、表情も生き生きとして来ました。公演が終わった後、歌手達はボロボロになったボーカル・スコアを記念に取っておきたい、と言っていました。この期間、学生達は先生方のお仕着せではなく、自分達の意志と力で充実した時間を勝ち取ったのです。

フレッシュコンサートに出演される方々は、本番に向けて充実した時間を過ごされていると想像しております。しかし、出演者の殆どは大学を卒業して間もないか、在学中の方々です。本当の音楽人生は、これからスタートすると言って過言でないでしょう。学生時代はそれほど生活の心配をすることなく、音楽に取り組むことが出来たと思います。しかし、卒業後は多くの方々が、生活と芸術活動の両立という難題に直面します。今の世の中は、その両立がなかなか困難だからです。生活の基盤を確保しながら、芸術活動を続けて行くにはどうしたらいいか。自分の音楽を一人でも多くの人々に聴いてもらうにはどうしたらよいか。色々考え悩むでしょうが、大いに考え悩んで下さい。『窮すれば通ず』という諺がありますが、悩みと正面から向かい合うことで、よい考えが浮かんで来るかもしれません。私がお薦めしたいのは、まず、お互いに切磋琢磨して共に歩んでいける仲間や友達を作ることです。その中には自分と考え方が異なる人や、専門、世代の異なる人がいてもいいのです。むしろ、その方が色々な刺激や知恵を受け取ることが出来るでしょう。

友人や仲間を作るには人との出逢いを大切にすることです。コンサートに出演した方なら、またたま一緒に出演した人たち、コンサートを支えてくれた会の人たち、聴きに来てくれたお客の皆様との出逢いもあります。

生活と芸術活動を両立させようと頑張れば、より忙しくなるかもしれませんが、それでも社会、政治、他分野の芸術など、色々な事に關心と興味を持ち続けてください。そして、人の悲しみや苦しみを感じとれる繊細な感性を失わずにいて下さい。人間は喜び、苦しみの両面から養分を得て成長して行くことが出来るのです。

これから、みなさんにどのような未来が訪れるかはわかりませんが、勇気と好奇心を抱いて、未来に挑んで下さい。そのような心を失わない限り、充実した時間を勝ち取ることが出来ると思います。

(なかじま・よういち フレッシュコンサート実行委員長)

## 「Fresh Concert CMDJ」、第10回を迎えて

作曲 助川敏弥

この会が主催する「Fresh Concert CMDJ 2012」が開催される。4月13日、18時30分開演、会場はすみだTriphonyの小ホール。

このシリーズは2003年に第一回が開かれたから今回は丁度10年目、第10回目となる。この間に多くのすぐれた新人が舞台に登場し世に出た。今回は、出演者は11人、毎回、声楽とピアノが多いが、これは自然な結果で、専攻者の絶対数が多いことの反映であろう。第一回目から昨年まで、出演者の演奏水準は次第に向上してきた。これは、すぐれた人材が出演するようになったのか、あるいは、この国の音楽水準全体が暫時上昇した結果の反映であるのか、両方の推測ができるが、おそらく後者であろう。

この企画の趣意は、いうまでもなく、新人たちに演奏会での実経験の場を持ってもらうことである。音楽演奏では、本番の経験を重ねることが進歩のため不可欠となる。どんなに練習をきびしくして、しかも、回数を重ねても、実践、実戦こそは不可欠の進歩の場である。実戦経験がなければ眞の実力とその向上は得られない。この点は、スポーツ選手や兵士も同じである。野球でもサッカーでも相撲でも、猛練習猛けいこをきびしく繰り返しても実戦の代りにはならない。本番ではやり直しは出来ない。時間との勝負である。時間の進行にすべてを賭ける体験を繰り返すのが本番である。今回はヴァイオリン、トランペットの出演もある。そして、歌とピアノも、曲目が平俗なものではなく、きびしく選択されたものになった。

新人たちにぜひ告げておきたいことがある。現代はコンクール主導の時代である。その結果、競争での勝者が世に出る。勝ち組である。そのため、勝った者の声だけが聞かれることになる。しかし、世の中は勝組だけではない。敗者もいれば傷ついた人もいる。悲しんでいる人もいる。競争主義の世の中ではこうした側の人の心が、歌われ、聞かれることがなくなったか、ごくまれになった。まことに嘆かわしい。音楽界も資本主義の競争原理が浸透してきたのである。若いひとたちは、競争に勝たねばならぬが、勝者ではない人の心を慰め癒すことも音楽の大事な使命であることを心に念じてほしい。

(すけがわ・としゃ 本会代表理事)

## コンサートへの期待

音楽学 吉田 泰輔

きびしい寒さをくぐりぬけ、ようやく花の季節がやってきました。草花の息吹と共に、人に時の区切りを意識させる頃でもあります。今は、時代の雰囲気や文化を活力に満ちた肩に背負い、未来に向けて羽ばたこうとする若い世代にとって、格別の意味を持つ時ではないのでしょうか。この時期は人生に一つのクライシスをもたらしますが、それと同時に、血肉となった修練の積み重ね、開き始めた自らの世界を世に知らしめる格好の機会をも提供してくれます。このコンサートも、若い表現者にとって、そうした機会の一つではないのでしょうか。

このコンサートを形容する「フレッシュ」の含意は、おそらく年代的なものを核としているのでしょうか。この年代の持つ「フレッシュ」さ、これはそれ自体魅力あるものです。しかし、私たちがいつまでも身体的に「フレッシュ」で在り続けるのは難しいことで、この意味での加齢や老は不可避です。しかし、精神的な「フレッシュ」の衰弱を押しとどめるのは、それぞれの人間力に掛かっています。齢を重ねても、その表現に接して、人々が「フレッシュ」を感じるかどうか、その表現者が『プロ』と認められるかどうかの重要な契機となるのではないのでしょうか。出演者の皆さんが、このまたとない機会を、それぞれのプロへの道程の一里塚とすべく力量を存分に発揮されることを期待しております。

(よしだ・たいすけ 音楽学 国立音楽大学 名誉教授)

---

## フレッシュコンサート 10周年に思う

作曲・エレクトーン 西山 淑子

フレッシュコンサートが10周年を迎えるとは、時の流れの速さに驚いております。いつの間にか、出演者の皆さんの『母』の年齢になってしまいました。毎年司会を仰せつかって、若い方達のエネルギッシュな演奏に触れる度に、「私もこんな頃があったなあ・・・」と思いつつも、「負けてはいられないっ！」という気も頂いています。

この10年、特にパソコン周辺機器の進化とそれに伴う情報量の増加、速さは、本当に目まぐるしく変化しました。世の中どんどん変わっているのに、ほとんど変わらないのが、出演者のコメントです。演奏のあと、必ず恒例のインタビューをしますが、『将来の夢は?』と聞くと、申し合わせたように大抵は『もっともっと精進して、世の中の役に立つ事をしたい』というような事を仰るのです。それでいつも思うのは、ぜひともみんな同じではなく、自分にしかできないやり方で役に立

ってほしいな、という事です。今、音楽で生きてゆくのは、本当に大変ですが、演奏家が世の役に立つ方法は、聴衆にたゆまぬ精進の結果を聞いて頂いて、感動や生きる力を感じて頂く、それしかないように思います。この事は、今年の震災後の音楽家たちの様々な活動でも証明されました。

そのために、どんなに便利な時代になっても変わる事のない、『楽器を演奏する』という人間にしかできない能力を伸ばし続けて行ってほしいものです。何でも機械やパソコンに頼ってしまい、本来持っている人間の能力がどんどん減退してゆくような生活だからこそ、体を使って自分を表現出来る私たちは幸運だとも思います。誰もが心豊かに生きてゆける時代をぜひとも若い皆さんに作って行ってほしいと、『母』は期待しております。

最後に、10年間この企画をプロデュースし続けてこられた、中島洋一氏に賞讃と感謝の意を表したいと思います。今後も末永く続く事を願ってやみません。

(にしやま・よしこ 本会作曲部会員)

---

## フレッシュコンサート10年に 高島 和義

いみじくも本会が創立50年を迎えた年に、新企画と思っていたフレッシュコンサートが10回を迎えた。

日本経済がバブルの崩壊とやらで、現在ほどではないが芸術分野への援助が極端に少なくなり始めたあの頃、経験の少ない若い演奏家の演奏活動を何とか援助したいと、従来本会が歩んでいた、成熟した演奏家の演奏会に加えて、若手に限った演奏会を企画したのは現在の本誌編集長である中島洋一理事だった。

初期には、会そのものも知名度が低く集客にも苦しんだが、出演者達の演奏グレードの高さにも支えられ順調に伸び、今までに延べ130人余の演奏家がこの舞台に乗られたことになる。大げさかもしれないが本会の目的「文化創成」をこれから担ってくれる人々を輩出できる「看板公演」の一つとなり得たと報告できる喜びを得た。

経済情勢の悪化は増すさなかで、より演奏機会の減る若い有能な演奏家のために、本会ではこのコンサート参加年齢制限をはずして、優れた演奏力を持ちながら機会に恵まれない方達を…、と始めた「若い翼によるCMDJコンサート」も好評のうちに今年5回目を迎える。いずれの公演も、若い情熱あふれた演奏に数々出会える。これらの才能ある若い音楽家が、音楽を志し続ける事が出来る機会を一寸でも提供出来る裏方になればと、今後とも大きく応援してゆきたい。

本誌読者の皆さんにも是非これらの会にお運びいただき、若さあふれる音楽を堪能されたいと願います。

(たかしま・かずよし 本会事務局長)

**特集** Fresh Concert –CMDJ 2012–の出演者に訊く！

Fresh Concert は本年、第10回目を迎えました。第1回～第4回までは座談会を開いて記事にしていますが、なかなか全員が集まれないので、第5回目からは幾つかの質問項目を用意し、その回答をこの雑誌に掲載するようにしています。昨年はこのコンサートの始まる約一ヶ月前に東日本大震災に襲われましたのが、今年は、(3.)に東日本大震災に関する質問を加えました。また、(5.)も、新しい質問項目です。(1. 2. 4.)は昨年と同じです。(6.)は一昨年にあったものを復活させました。

1. 今回のコンサートへの抱負、演奏する曲に対する思いなどを込めたメッセージをお願いします。
2. 音楽は、あなたにとって、いかなるものですか。
3. 東日本大震災について、何を感じ、何を考えましたか。
4. 取り組んでみたい研究テーマ、挑戦してみたい、作曲家、作品は？
5. 一生のうちに経験しておきたいこと、経験したくないことは？  
(音楽に限らず、なんでもよいです)
6. あなたの長所と欠点を上げて下さい。
7. その他(書きたいことをなんでも書いて下さい。書かなくともいいです)

出演者の方々の回答を読むと、さすがに(1.)のメッセージは例年通り皆さんが力を入れて書いておられますが、今年は特に(3.)の大震災については、被災者の方々に同情しながらも、そういう人達のために、なにもしてあげられない無力感などが正直に書かれておりました。また大震災を通して、改めて今生きている時間の大切さを噛みしめた。というようなことを書いた人もいました。いま特に何か出来なくとも、他人の悲しみや不幸に心を動かされる気持ちだけは忘れずに持ち続けていただきたいと思います。(5.)については、なかなか行けない遠い所への旅を経験したいという回答が多かったようです。月旅行といった微笑ましいものもありましたが、一生に一度は子育てを経験したい、という素朴な願いもありました。経験したくないものとしては、愛する人との別れ、病気、怪我など、誰もが願わないものが上げられておりました。しかし、願ったものが適えられず、経験したくなかったことを経験してしまうのも人生です。もし、経験したくないことを経験しても、それを乗り越え、人生の糧としていただきたいと思います。それでは、出演者のみなさんの回答を、演奏順に紹介させていただきます。

なお、ページ数節約のため、質問事項の重複掲載は避け、回答のみを掲載させていただきました。それから、金管五重奏については、都合で個別に二名の方から回答をいただきましたので、二名の方のみ掲載させていただきました。出演者の写真につきましてはプログラムのページに掲載しておりますので、そちらを併せてご覧頂きたいと存じます。

## ① 原田 智代 (ソプラノ)

1. それぞれの作品の魅力を、ホール中に楽しんで響かせたいです。  
ドビュッシーの二曲は、作曲家の初期の作品で、爽やかでとても若々しいです。ドリーブの「カディスの娘たち」は、曲想が変わり、ビゼーのカルメンのような魅惑的な旋律がかかれています。ドリーブの「カディスの娘たち」は、普段の私の性格から離れているキャラクターなので、自分の中から引き出して演じられたらと思います。
2. 音楽は私を元気づけ幸せにしてくれるもの。常に私の中にあるものだと思います。
3. 人生は一度しかないと強く感じました。今できること、またやりたいことはやっていこうと思いました。
4. ラヴェルの歌曲。プッチーニの歌劇「ラ・ボエーム」のミミ。
5. オーロラを見にカナダに行きたい。  
スキューバダイビングの資格を取って、南国（フィジーとか）の海に潜ってみたい。  
経験したくないことは、何か大きな事件とかには巻き込まれたくない。
6. 長所は、探求心があっていろいろ興味をもつこと。短所は、三日坊主で続けることができずあきらめてしまうこと。

## ② 山上 由布子 (ピアノ)

1. フレッシュコンサートに出演させて頂けること、大変嬉しく思っております。  
このような素敵な機会を与えられたことに感謝し、今の自分にできるピアノ演奏でお返ししたいと思っております。そして、この曲でショパンが伝えたかった感情を、少しでも舞台上で表現できるよう、努力していきたいです。
2. 悩みや苦しみ、感動や喜びを与えて人を成長させてくれる、不思議な魅力のあるもの。
3. 昨年3月11日の大震災で、突然に命を失われてしまった方々へのご冥福をお祈りいたします。  
今回被災した東北は、母の故郷であり、私自身も何度も訪れたことのある場所です。実際に、去年の6月に気仙沼へ足を運び、慣れ親しんだ街を見て参りました。  
そこには何もありませんでした。  
あるのは瓦礫の山と海だけです。  
すでに亡くなった祖父母との想い出の場所も無く、涙しかでませんでした。しかし、ここで立ち止まらず、全ての人が、一つひとつ確かな毎日を過ごすことが、復興への道につながると考えております。

# 音楽現代

2012年4月号 定価 840円

- ♪特集＝音楽（音楽史）を変革した作品たち
- ♪特別企画＝ラ・フォル・ジュルネ・オ・ジャポン 2012  
〈サクル・リュス＝ロシアの祭典〉
- ♪特別追悼企画＝グスタフ・レオンハルトの芸術
- ♪インタビュー  
ルネ・マルタン、ラリッサ・デードワ  
フランソワ＝グザヴィエ・ロト、村治奏一 他
- ♪カラー口絵
  - ・新国立劇場「沈黙」
  - ・東京二期会「ナブッコ」
  - ・リュニオン～ゴルトベルク変奏曲
  - ・熊川哲也 Bunkamura オーチャードホール芸術監督就任  
記念Kバレエカンパニー「シンデレラ」

〒111-0054 東京都台東区鳥越 2-11-11

TOMYビル 3F

芸術現代社 TEL 3861-2159

一人ひとりのやさしさが、大きな力となりますように。

4. バロックから古典派の時代のもの。構造を理解してじっくり勉強したいです。

5. 考えても思いつかないのですが…。

経験できること、できないこと、どちらも自分の人生にとって必要なことだと思って生きていこうかな…。経験したいことがあったら、自ら行動して経験できるように努力したいです。

6. 長所も短所も、石橋を叩いて渡るところだと思っています。

### ③ 箕浦 綾乃 (ソプラノ)

1. この度は、このような演奏会に出演させていただき、ありがとうございます。大学院でお世話になった先生方、友達、私を支えてくれたたくさんの方々、そして今日ご来場いただいた方に感謝の想いをこめて、演奏させていただきたいと思います。大学院では、たくさんの先生にご指導を受ける機会があり、その時は消化できなかったことも含め、歌を歌う上で大事な基盤となるものをたくさんいただいたように思います。これからは、その基盤をもとに、学んできたことを活かしつつ、発展させて、新たなものを探していく時期になるのだと思います。そのための第一歩として今日のようなコンサートで、たくさんのお客様に聴いていただけることは、私にとって至上の喜びです。

今日歌わせていただくのは、《キャンディード》よりクネゴンデの aria “きらびやかに着飾って”です。わが身の不運を歌うなかでも、今ある状況を楽しんじゃうというのはとても人間らしいというか、女性らしいというか…明るさと強さでもって幸せを掴みとる彼女の生き方に私の方が元気をもらっています(笑)皆さまにも彼女の心が届いて、少しでも楽しくなってもらえますよう、精一杯歌わせていただきます。

最後になりましたが、学部から6年間私を見守り、本当の歌は何かということを見せてくださった小泉先生、そして私を長年支えて続けてくれたピアニストに、格別の感謝を申しまして、結びとさせていただきます。

2. 私にとって音楽は、いつでも共にあって、喜びや苦しみや、人生の様々な色を教えてくれる美しいものです。歌という形で音楽に触れられることを、本当に幸せに思います。

3. 一番感じたのは無力感でした。まったく予想もしていない出来事で、ある日突然、大切な家族や故郷を失った方の気持ちは想像するにあまりあります。自分が今やっている音楽に、虚しさを感じた時もありました。ですが、まだ震災からいくらも経っておらず、支援もままならない頃、ある番組で紹介された被災者の手紙の中に、『毎日大変ですが、昨日、千昌夫さんが避難所に来て、歌を歌ってくれました。歌って、いいですね。』という言葉聞き、被災された方に私ができることもあるかもしれないと思いました。

まだまだ復興には時間がかかると言われていますが、私は自分にできる最大限のことで、復興の力になりたいと思っています。

4. オペレッタが好きなので、まだ日本で無名なオペレッタをたくさん発掘したいです。後はフランス歌曲、特にラヴェルに興味があります。またこれは野望ですが、いつかシャンソンの勉強もしてみたいです。

5. 経験したいことは、世界放浪と月までの宇宙旅行(笑)。経験したくないことは、なんでしょうね…バンジージャンプとかですかね。

6. 長所は、人のいいところを見つけるのがうまいこと、短所は自分のいいところを見つけるのが下手なことでしょうか(笑)。

#### ④ 西尾 自由梨 (ピアノ)

1. この度はこのような素敵なコンサートに参加する機会をいただき、とても有難く思っています。いつも真摯に向き合って指導して下さる先生をはじめ、家族、友達、かかわるすべての皆様に感謝の気持ちを込めて弾かせていただきたいと思います。

2. 生活の一部です

3. 未曾有の大震災から早1年が過ぎましたが、まだまだ被災地の方々は困難な状況で生活されていることと思います。原発の問題も山積みです。

とくに被災のない地域でのうのうと暮らしている自分はなんなんだろうと、何もできない無力さにもどかしい思いでいっぱいです。

しかし、いつか必ず被災された皆様が元の生活を送れるようになることを信じています。私は幼少のころ阪神淡路大震災の被害を受けましたが、あれだけの被害を受けた神戸でも、16年ほどかけて復興することが出来ました。

被災地の方々が本当に笑って過ごせる日が来ますよう、心からお祈り申し上げます。

4. 色々なジャンルに挑戦してみたいです

5. 地球上のいろんな場所に旅してみたいです

6. やると決めたらすぐ実行することが長所です。逆に、興味・関心のないことは必要であってもすぐ忘れてしまうことが短所です。

#### ⑤ 城 佑里 (ソプラノ)

1. この度は、このような素晴らしいコンサートに出演させていただく機会を与えて下さり、心より感謝致しております。今回歌わせて頂くのは、歌劇《清教徒》よりエルヴィーラの aria です。この曲は、私にとって、とても良い課題となる曲でした。前半の美しい旋律もさる事ながら、特に後半の軽快なカヴァレッタは非常に技巧的なものとなっており、聴きごたえ十分な曲です。いつもあたたかくご指導下さり、見守って下さる先生をはじめ、支えて下さる皆様に感謝の気持ちを込めて歌いたいと思います。

2. 近付けば離れ、掴めば零れ、毎回厚い壁に眩暈を覚えながらも共存していたい大切なものです。

3. 去年の東日本大震災から一年が経ち、より人の想いのあたたかさを再認識する事となりました。私は、どのような運命か、去年の3月10日と11日、福島県のいわき湯本に卒業旅行で居合わせ、大変貴重な体験をしました。誰もが様々な恐怖に怯える中で、共に支え合い、人を想い、助けられた事、人の温かさは、一生忘れません。現在、いわき湯本温泉の旅館は、風評被害を乗り越え、被災される前とほぼ同様に営業活動をされていると知りました。同時に、神様は乗り越えられる試練しか与えない、という言葉思い出しました。

4. 様々な音楽に触れてゆきたいと思っておりますが、フランス・オペラやドイツ・オペラは経験が浅いのでもっと学んでゆきたいです。

5. 音楽関係ではありませんが、世界遺産観光がしたいです。(マチュ・ピチュやチンクエテッレが特に！)

6. 長所は緊張しているのにそう見えないところです。ですので、欠点はその逆ではないでしょうか・・・。

⑥ 粟津 惇(ヴァイオリン)

1. この度は出演させて頂き本当にありがとうございます。今回ジョイントコンサートという事でとても楽しみです。イザイのバラードは無伴奏ではありますが、バイオリンの魅力が詰まった曲ですし、唯一の弦楽器ということで歌や他楽器の皆さんに恥じない魅力をお見せできたらと思っています。
2. 一番好きなもので、研究していく事を通して人間としての自分を高めていくものです。
3. すぐ側にいる助けが必要な人に、自分が何をできるのか?自分の仕事にどういうモチベーションで取り組めばいいのか。
4. 個々の作曲家というよりは、ひとつの演奏会を楽しみ、あるいは感動のある時間としてつくりあげる事を磨いていきたいと思っています。
5. 死ぬまでには子育てをしたい
6. 大らかで大雑把。

⑦ 金管五重奏団 <Pensieri Brass Quintet>

今回は二人の方から回答をいただきました。

A 三嶋 雪音(第2トランペット)

1. 私にとって、音楽大学を卒業して初めての演奏会となります。音楽家としての第一歩を踏み出すため、新鮮でレベルの高い演奏をしたいと思っています。
2. 私にとって音楽とはなくてはならないもので、感情表現の一つだと思っています。
3. 自分の無力さを感じ、自分がすべきことを考えました。
4. ポップスやジャズ、古典を研究していきたいです。
5. 自分のやりたいことは全てやる!病気にはなりたくないです...
6. 明るく、前向きなところです。欠点は雑把なところです。

B 古田 龍平(ホルン)

1. ホルンが大活躍するカッコイイ曲なので頑張ります。
2. 音楽は、いつもそばにいるもの。
3. いつも当たり前な事が実はとても尊いものであるということ。
4. 緊張に打ち勝つ。古典全般。
5. 家族を持って平凡でも幸せな人生をおくる。さらに演奏家として生活出来れば言うこと無し。
6. 長所→見た目落ち着きがある年寄り。欠点→極度に緊張すると発症する過呼吸。
7. 私達のアンサンブルならではの爆音に注目してノリノリでお聞き下さい。

## ⑧ 柏木 沙友里 (ソプラノ)

1. この度は、このような素敵なコンサートに出演させていただけますことを、とても嬉しく思います。今回演奏させていただくのは、歌劇《ファウスト》の中から、乙女マルグリットが歌うアリアです。彼女は、ファウストのことを、「あの方の優しさと気品は、まるで貴族のようだったわ」と呟きながら“トゥーレの王”を歌います。そこで宝石箱を見つけ、これまでに見たこともない美しい宝石に感激して“宝石の歌”を歌います。今回は、この二つの名アリアが存在する一つのシーンを演奏させていただきます。マルグリットが、次第にメフィストフェレスの魔力によって心を奪われていく様子を、ご覧頂けたら幸いです。
2. まるで恋人のような存在です。音楽は、私に最高の幸せを感じさせてくれます。大好きだからこそ、胸がすごく苦しくなることもあります。でも無くてはならない存在なのです。
3. 胸が張り裂ける思いでした。この震災の傷跡をいつまでも忘れずに、精一杯生きていきたいです。
4. いろいろな音楽に触れて行きたいですが、モーツァルトのオペラは、どれも興味深いです。取り組んでみたい研究テーマは、パミーナから見た《魔笛》などといった、自分が演じるキャラクターから見た物語の研究です。
5. 経験したいことは、生まれ育った日本の歌曲を研究し、深く理解して演奏することです。経験したくないことは、人前で心のない歌を歌うことです。
6. ご飯を短時間で沢山食べられる。すぐ胃が痛くなる。

## ⑨ 林 聡子 (ピアノ)

1. なかなか演奏する機会がない中、このような素晴らしい演奏会に出演させていただき感謝しています。  
主題は古いポルトガルのメロディー〈フォリア〉で、多くの作曲家がこの主題を用いて曲を作っていますが、ラフマニノフのこの曲を通して生涯を綴るように進められる、複雑な内面を表現出来たらと思います。
2. すべて音楽が中心になっている気がします。
3. 物事は一瞬にして変わってしまうのだと感じました。自分の心に正直に、今を大切にしたいと思います。
4. 特にベートーヴェンをより深く勉強したいです。
5. 1人で海外旅行がしてみたいです。
6. 我慢強いのが長所で短所はそそっかしいところです。

## ⑩ 三井 清夏 (ソプラノ)

1. この度は、フレッシュコンサートに出演させていただける事を大変嬉しく思っております。中島先生をはじめ、コンサートに携わる全ての方々に、この場をお借りして感謝申し上げます。今回、選曲したヴェルディ作曲 歌劇「椿姫」ヴィオレッタのアリアは、声楽を始めた頃から、いつかは歌ってみたいと思っていた憧れの一曲です。  
高級娼婦であるヴィオレッタが、アルフレードに出会うことによって真実の愛に目覚めます。喜びに浸るも、娼婦であることを自嘲する。心情の襞が幾重にもなるこのアリアは、

私にたくさんの課題を与えてくれます。今の私にできる演奏を心を込めてお届けできたら  
と思っております。

2. なくてはならないもの。命です。

3. 何事もなく、平凡な毎日が、どれほど尊いものなのかということをお願いされました。悲しみに暮れる方々の心に寄り添い、小さくてもあたたかな支援をこれからも継続して  
いきたいと改めて思っています。

4. ジャンルを制限せずに、何にでもチャレンジしていきたいと思っています。

魅力的で興味のある作品はたくさんありますが、日本の曲を耳にすると、やはり心が落ち  
着き、ホッとあたたかい気持ちになります。今後は、日本歌曲のレパートリーも増やして  
いきたいです。

5. 経験しておきたいことは、可能な限り色んな国へ行き、見識を深めること。富士登山。  
経験したくないことは、大切な人との別れ。

6. 長所は、明るく、良く笑うところでしょうか。

欠点は、のんびりマイペースなところ。

## ⑪ 小林 啓倫 (バリトン)

1. 私はこの新人演奏会に出演させて頂くにあたり、これまで特に力を注いで参りました  
ドイツ・リートとオペラ作品より、それぞれ一曲ずつ演奏させて頂く事に致しました。  
先ずドイツ・リートの作品は、物語詩を題材に作曲されるバラード。そのバラードの王様  
と称される C. Loewe 作曲の“オルフ氏”を演奏させて頂きます。ドイツ・リートのバラ  
ード作品、とりわけ彼の作品は、その短い曲の中に、長いオペラで語られる物語が全て凝  
縮されている様であり、また複数の登場人物を一人で演じ分けることが要求されていて、  
ドイツ・リートの芸術性と奥深さを深く表現している作品だと思い、この作品に挑戦させ  
て頂く事に致しました。登場人物の個性や劇的な物語を表現し、皆様にお伝えするこ  
とが出来れば幸いです。

次に、オペラ作品からは G. Bizet 作曲のオペラ《Carmen》より、“闘牛士の歌”を演  
奏させて頂きます。このアリアは皆様もご存知のとおりとても有名で、オペラの花形であ  
ります。いつか大きな舞台でオペラの主役を演じられるよう、願いを込めまして演じさせ  
て頂きます。

2. 私にとって音楽とは小さな頃より常に近くにあり、クラシック以外のジャンルや歌以  
外の楽器もいくつか経験させて頂きました。私にとって音楽はコミュニケーションであり、  
フラストレーションそのものであると同時にその解消の手段でもあり、自分自身を表現で  
きるものであり、大好きなものであります。

3. 東日本大震災では、あまりにも多くの尊い命が失われた事への悲しみや、自然への畏  
怖の念、行政などへの憤り、他国の支援への感謝と感動。沢山の経験した事のない感情や  
想いがいっぺんに押し寄せてきて未だに整理することが出来ません。自分一人が出来ること  
は本当に小さく無力でした。だからこそ私たち一人一人に出来る事は自分の人生を精一  
杯生きてゆく事ではないか。今はそう感じています。

4. G. Verdi のオペラ作品。また J. S. Bach などの受難曲やカンタータなど宗教曲。

5. 一生のうちに経験してみたいのは、世界一周旅行。したくないのは、ケガと病気。

6. 長所と短所は、人に優しく、自分にはもっと優しい。

## 過去の出演者からのメッセージ



### 戸田 竜太郎 (クラリネット) 第1回出演者

フレッシュコンサートが記念すべき10周年を迎えられたとのこと、誠におめでとうございます。第1回フレッシュコンサートで、私はブラームス作曲：クラリネットソナタ第2番を演奏いたしました。いま振り返ってみますとフレッシュコンサートに向けた練習の日々は、作品と自分がきちんと向き合っ、正面から取り組むことができた貴重な時間であったと思います。そして本番が終わったあと、自分が思い描いていた音楽と自分の演奏とのギャップに、新たな“音楽的な欲”のようなものが湧いてきたことが印象に残っています。貴重な時間を与えていただきありがとうございます。このフレッシュコンサートが20回、30回と積み重なって更に発展されることを願っております。



### 植田 さや香 (ピアノ) 第1回/第2回出演者

フレッシュコンサート第10回の開催、おめでとうございます。私は第1回、第2回と出演させて頂いたのですが、もう10年も前のことなんですね。当時の私は人前での演奏やアンサンブルに不慣れだったので、とても緊張していたのを覚えています。そんな中でもフレッシュコンサートは、音楽を通して自分と向かい合い他人と繋がる喜びを感じることのできる最初の場だったように思います。

その後色々な場所で沢山の方と演奏する機会がありましたが、その思いは変わることがありません。今回の出演者の方にも、その喜びを是非味わって頂きたいと思います。演奏会のご成功と、益々のご発展を心よりお祈りしています。



### 湯川 亜也子 (メゾ・ソプラノ) 第5回出演者

この度は、フレッシュコンサートのご出演、おめでとうございます。また、本年をもちまして本コンサートも第10回目を迎えられるとの事、誠におめでとうございます。中島先生をはじめ、たくさんの先生方にご指導、ご助言を賜りながら、舞台での経験を通して学ばせて頂けず事を、心より感謝申し上げます。本年度、記念すべき第10回フレッシュコンサートご出演の皆様におかれましては、これからの益々のご活躍を心よりお祈り申し上げます。

### 神田 麻衣 (ピアノ) 第5回出演者

第10回フレッシュコンサートご出演おめでとうございます。私は2007年のフレッシュコンサートにピアノソロにて出演させて頂きました。



国立音楽大学を卒業後、桐朋学園大学カレッジディプロマコースに一年在籍し終えた年でした。出演のお話を頂いたのは桐朋学園大学に在籍していた頃ですが、ちょうどこの頃は自分の中に劣等感や将来への不安が少なからずあり、自身を失くしていた時期でもありました。しかし国立音楽大学時代に大変お世話になった中島洋一先生から是非にと仰って頂き、出演を決意しました。この出演がきっかけで音舞会に入らせて頂き、光栄にも様々なコンサートに出演させて頂きました。その中で感じたことは、人と人との繋がり大切さ、そして音楽の無限なる可能性です。アドバイスできるような立場ではございませんが、皆様にもこの出演を通して何かを得て頂けると嬉しく思います。益々のご活躍を心よりお祈りしております。



### 元田 絢子（ピアノ）第5回／第6回出演者

フレッシュコンサートのご出演、おめでとうございます。今までの成果を発揮され、思い出に残る素晴らしいコンサートとなりますよう、心からお祈り申し上げます。――

### 古川 詠子（ソプラノ）第6回出演者

フレッシュコンサート出演者、皆様、第十回フレッシュコンサート開催、おめでとうございます。今でも、私が出演させていただいたときの、目がくらむような明るい照明のステージから真剣に舞台を見つめる客席の様子を思い浮かべ、心臓の鼓動と、手が震え、汗をかいたことさえ、数秒ごとに心地よくなったのを思い出します。

去年は、震災の中演奏会を開催されたとのこと。震災当日、明るくなり始めたスウェーデンの早朝、家族から電話でしらせられ、インターネットで情報が錯綜し、電話もなぜか中国にしかつながらない数日間もあり、毎日毎日心配し、とにかく眠れない日が続きました。

これほどまでに実態がわからず、自分が何もできず歯がゆい思いをし、不安と恐怖だけが積み重なり悲しくなったことはありませんでした。

2ヶ月ほどたって、日本を心配する何かをしたい人たちでチャリティーコンサートをしました。このコンサートは日本のためだけでなく、日本を思う在外日本人、スウェーデン人、みんなと時間を共にし、励まし合い、そして自分のできることを見つけ、少しでも寄付になれば、というコンサートにしました。そうでもしなければ、日本に一時的に帰れずに、よけいな心配ばかりで気持ちが治まらなかったというのが正直なところだと思います。きっかけは実際に仙台の知り合いへの電話でした。張りのある声、前向きな姿勢に、私が励まされ、悲しんでいる場合ではない、しっかりしなくてはと思いました。「もう何かができなくなる。」ではなく、「毎日何かをして明日を迎えること。」が生きているということなんだ。当たり前ですが、そう思いました。日本に先日帰国し、前向きで明るい笑顔、そしてそれぞれを思いやる人、すばらしい自然、太陽の光を目にして、たくさんの良いところが見えまたさらに励まされました。私もコンサートで歌ったときのように、心いっぱい、ホールいっぱいに気持ちを広げられるような広い心で毎日をすごしたいです。



あのときの明るいエネルギーいっぱいのステージを思いながら、演奏会のご成功、今後のご活躍をお祈りいたします。



### 工藤 慎子(ピアノ) 第7回出演者

2009年にシヨスタコービッチのピアノトリオで参加させていただきました、工藤慎子です。2009年のフレッシュコンサートを振り返り、がむしゃらだった日々を思い出します。“憧れ”というだけで挑戦したシヨスタコービッチ作曲の『ピアノトリオ第2番』は、それまで経験したことのないパッセージがあったり、今までにない音色を要求されたりと、とても大変な曲でした。しかし、ヴァイオリンの大羽さんとチェロの花澤さんに助けられて乗り越えることができ、

共にたくさんのことを学びました。

昨年に子供が生まれ、昭和音楽大学伴奏研究員としてバレエ伴奏に励む傍ら、育児にも挑戦しています。曲と出会い、壁にぶつかりながらも一生懸命弾き熟して温めることは、子育てに相通じることだと感じる毎日です。

第10回フレッシュコンサートにご出演の皆様、今回演奏なさる作品を始め、“曲”という子供を大切になさってください。



### 増子 あゆみ(ソプラノ) 第7回出演者

Fresh Concert も今年で第10回目を迎えられ、大変喜ばしく思います！！

Fresh Concert2012にご出演の皆様、おめでとうございます！！私が出演させて頂いたのは2009年ですから、もう3年前！月日が経つのは早いものです。当時、大学院を出たばかりで右も左もわからない状態。多くの先輩方が歌ってきた素晴らしい舞台に、私も立たせて頂けるという喜びに満ち溢れ、その日一日中興奮の嵐に包まれてい

ました！！肝心の演奏はというと、その当時出来る精一杯の演奏でしたが、まだまだ多くの課題があることを実感するものでもありでした。あれから3年、その間多くの経験を積んで参りました。その一つ一つは、今も私の大切な宝物となっています。

昨年は未曾有の大震災に見舞われ多くの方が被災し、日本中が悲しみました。私自身、ごく普通の生活ができることや家族・友人の存在のありがたさ、こうして歌えることがいかに幸せなのかということを実感してきました。Fresh Concert2012にご出演される皆様には、このような機会を与えて下さった方々に感謝し、素晴らしい舞台に立てるという誇りと、これから自身がどのような音楽家になりたいのかということをしっかりと持って、演奏に臨んで頂けたらと思います。



### 今井梨紗子(ソプラノ) 第9回出演者

フレッシュコンサート第10回目の開催 おめでとうございます。中島先生はじめ日本音楽舞踊会議の皆様にご貴重な機会を頂きましたこと御礼申し上げます。本年のフレッシュコンサートも、素敵な会になりますよう お祈りしております。



### 大武彩子（ソプラノ） 第9回出演者

この度は、第10回目 Fresh Concert の開催、おめでとうございます。  
昨年出演させていただきました、ソプラノの大武彩子と申します。大震災の直後で開催が危ぶまれた年でしたが、中島先生をはじめ関係者の方々の信念の元、思いが一つになったコンサートを開くことができました。聴きに來てくださったお客様のあたたかさ、忘れられません。

非常事態における音楽の必要性は、即時的な効果を期待できるものに比べ、低いかもしれません。しかしそれでも、音楽の中に身を置くことは自分にとって何にも代え難い喜びであり、それにより心が健康になるのだと、このコンサートを通じてあらためて感じることができました。まだまだ勉強中の身ですが、聴いてくださる皆様にも喜びや感動を味わっていただけるような演奏を求め、精進してゆく所存です。

これ迄の関係者及び出演者の皆様に敬意を表すと共に、Fresh Concert の益々の発展をお祈り申し上げます。

## 過去の Fresh Concert CMDJ の開催記録

第1回	2003年3月19日（水）	：18:30	新宿角筈区民センターホール
第2回	2004年4月6日（火）	：18:30	めぐろパーシモンホール（小）
第3回	2005年3月30日（水）	：18:30	めぐろパーシモンホール（小）
第4回	2006年3月28日（火）	：18:30	めぐろパーシモンホール（小）
第5回	2007年4月6日（金）	：18:30	すみだトリフォニーホール（小）
第6回	2008年4月5日（土）	：18:30	すみだトリフォニーホール（小）
第7回	2009年4月8日（水）	：18:30	すみだトリフォニーホール（小）
第8回	2010年4月9日（金）	：18:30	すみだトリフォニーホール（小）
第9回	2011年4月8日（金）	：18:30	すみだトリフォニーホール（小）

※演奏曲目、毎回の出演者など詳細情報をごらんになりたい方は  
インターネットの以下のURLにアクセスして下さい。

[http://www5c.biglobe.ne.jp/~onbukai/concert/Fresh\\_concert\\_top.htm](http://www5c.biglobe.ne.jp/~onbukai/concert/Fresh_concert_top.htm)

日本音楽舞踊会議 のキーワードで検索すると以下のURLが表示されます。

<http://www5c.biglobe.ne.jp/~onbukai/>

ここから上記のページに入れます。

光宇宙と書いて、「ぴかちゅう」と読ませる。男の子の名前。このごろの子どもの名前事情ということで、週刊誌の話題。

東京都内の塾講師他への取材などからまとめられている。それによれば、ここ数年増えているのが、葉萌似（は一もに一）、新千絵（にいちえ）、愛忠人（えちゅうど）といった当て字系の名前や、判じ物系では、七音（どれみ）、音奏（めろでい）、光子（きらら）などであるという。

いずれも本当ですか？大丈夫ですか？と他人事ながら心配してしまう。出席をとる時の様子をのぞいてみたい。意外と本人とまわりも違和感なくスムーズなのだろうか。

名前に使用できる漢字の制限が緩和されたことをきっかけに、若い親たちは命名の発想にフリーハンドが得られたと、はりきっているのかもしれない。

また、ベビー・マタニティ用品専門店「赤ちゃん本舗」の2011年赤ちゃんお名前ランキングによると、新生児の5人に1人の割合で、キラキラネーム（誰とも被（かぶ）らない名前）がつけられているという。

そのキラキラネームから拾ってみる。  
～宝冠（ていあら）、七月（じゅり）、聖母（まりあ）、天馬（ぺがさす）、加速（あくせる）～。

これからはグローバル。外国人にも違和感のない五月（メイ）にしたというのを、以前聞いたことがある。その時、知人の猫（5月生まれ）もメイだったことを思い出したのだった。

ペンネームなら面白いで良いけれど、一生背負っていくのだからねキラキラネーム。さらにあげればきりが無いが、主音（とにか）、美音楽（びおら）なんていうのもあって。それも男の子につけられた名前だという。こうなると、少女漫画の世界よろしく、もう何でもありの様相を呈してくる。

思い出してみるに、私の子どものころの同級生の女子の名前には「子」のつくものが多かったように思う。で、それはこれから調べてみる。

名前というのは、時代を反映するということがあって、女子だから「子」で、ということでもないのだろうが、「子」がつくと、一目で男女の区別が付きやすいということでは便利である。便利とは何事ぞ！には、この際、耳をふさぐ。

同級生の名簿を確認してみた結果だが、思ったとおりで、30名中25名に「子」がついていた。

そういえば、壺井栄著「二十四の瞳」に、名前をめぐる先生と生徒のやりとりがあった。それは、百合の花の描かれているアルマイトのお弁当箱の話題から、赤ちゃんの名前のことになって・・・。

「うちのお母さん、女の子うんだ」

「あらそうおめでとう　なんて名前？」

「まだわからんの」

「ふーん。ユリちゃんにきなさい。ユリコ？ユリエ？先生ユリエのほうがすきだわ。ユリコはこのごろたくさんあるから」

この小説の舞台は昭和の初期、瀬戸内海べり（小豆島）の一寒村の小学校とある。この時代の女の子の名前には「子」がつくのが『たくさんあった』ということなのだ。そしてそれは大正時代からのことのようにも見える。

子どもの誕生！親は、あれこれの願いを名前にこめて、命名する。「命名一二三」などと色紙に書き、壁にとめて乾杯。

さて、この「一二三」だが、「わるつ」と読むのだそうだ。古くは「ひふみ」と読ませるのは聞いたことがあるけれど。

将来、新郎主音（とにか）君と新婦一二三（わるつ）さんに、子どもが誕生したら、さてその名前は？心配、いや興味深いことだ。小夜（せれな）とでもしますか。

小夜曲＝セレナード、のもじりなのでしょう。小夜（せれな）という女の子の名前、実在するのだ。

「壮」と書いてタケシと読む。私の名前だ。めったにタケシと読んでもらえない。漢和辞典にあたると、この字は<名付け>として、「あき/お/さかり/さかんたけ/たけし/まさ/もり/となっている。名前としては、8通りに使用可としてあげられているのだけれど。この調子だとこれからも増えるのかもしれない。

辞書にあたっても、8通りの中から一つが正解じゃ、読めなくてあたりまえ。それで私の名刺にはローマ字表記もつ

.....  
**【筆者紹介】狭間 壮(はざま たけし)：**中央大学法学部法律学科卒。音楽教育を関鑑子氏に、声楽を大槻秀元氏に師事。大学在学中NHK「私達の音楽会」出演を機に音楽活動を始める。松本市芸術文化功労賞、他を受賞。夫人の狭間由香氏とのアンサンブルで幅広い音楽活動を展開している。

けてある。

そのおかげで、初対面の話題のきっかけになることもあって、こんな時は名前の効用に感謝せねばと思う。光宇宙（ぴかちゅう）なんて名刺を受けたその相手方の反応、見たいものである。

ともあれ名前は一生もの。名付けられた子が、命名の意図（親の思い）を納得し、喜べるものであるか、につきる。

走太（じょんそん）はいかがか。陸上100Mのベン・ジョンソン（カナダ）かららしいが、こんな名前つけられたら、私なら家裁に申し出て、改名の手続きをとる。実在の名前だと紹介されているが、その「じょんそん」君の感想を是非聞いてみたい。

これらの凝った名前を見ていると、音楽や音をヒントにしているものが多い気がするが、もう少し詳しく知りたいものだ。そして、その理由をも。音楽に関わるものの一人として、興味がある。

ことのついでにだが、こんな名前も紹介されている。—①無②暴③彗斗④朱光⑤卓瑠⑥一夜子⑦円丸—これは次のように読むのだそうだ。<①のん②あらし③じえっと④すぴか⑤たっくる⑥ひよこ⑦まとまる>と、まとまりましたところで、ペンをおくことにしたい。お後がよろしいようで。

（注：タイトル「夢民」はムーミンと、「今鹿」はノウシカですって。）





## 名曲喫茶の片隅から

宮本 英世

### 〔第 28 回〕 作曲家たちの記憶力

演奏家たちはどう思っているか知らないが、聴く側からいつも驚かされ感服させられるのは、「よくもまあ、あんなに長く複雑な曲を暗譜で弾けるものだなあ！」である。音楽会で協奏曲やソナタを聴いた時である。ベートーヴェンにしるショパンにしる、リストやラフマニノフにしる、そのほか誰の作品にしる、楽譜にはオタマジャクシがびっしりと詰まっている。それも右手・左手のそれぞれに、びっしりと。

「それだけやっている蛮族だから」とか「算盤の暗算みたいなものですよ」なんていう人もいるけれど、努力だけではない、生まれつきの記憶力のようなものが、彼（女）らには備わっているものではなからうか。

では、演奏家に曲を提供する「作曲家」たちは、どうだろう？彼らもまた思い浮かんだ楽想を保持し、つなげ、長い曲に仕上げる。そして演奏してみるという点で、優れた記憶力を持っていたのではなからうか——という好奇心から、今月はそれに関するエピソードを探ってみよう。

伝説などによると、例えば次々と作曲したのはよいが、忘れるのも早く、街で聞こえてきた自作の曲を「いい曲だね。誰の曲？」とたずねたというシューベルトとか、同じ曲を女性に渡すたびに少しずつ書き違えた（したがって定まった版を作るのに苦

勞させられた）ショパン。あるいは記憶力と結びつくかどうか、他人に注文をつけられるとすぐに手を加えてしまったブルックナーらは、無頓着という点で多分、記憶力は悪い方だったかもしれない。

それに対し、凄い！と思わせるのは、次に登場する作曲家たちである。筆頭はあるモーツァルトで、こんなエピソードを残している。14才の1770年4月、父親とともに初めてイタリア旅行に出かけた折、ローマ・ヴァチカン宮殿付属のシスティナ礼拝堂を訪問すると、そこでグレゴリオ・アレグリ作曲の「ミゼレーレ」（9声部の複雑な曲）を聴いた。この曲は門外不出になっていて、楽譜を見ることが出来ない。しかし14才のモーツァルトはしっかりと頭に刻み込むと、外へ出てから正確に書いて見せて、「盗み見たのではないか」と調べられた。

しかし記憶力によるものとわかると、感心した教皇クレメンス14世から「黄金拍車」の勲章を贈られた、というのである。「ミゼレーレ」は私たちがCDで聴くことが出来るが、なるほど耳だけで聴いて採譜するには大変だと思われるかなりの曲である。そうでなくとも35才の短い人生に700曲以上を書き、傑作が多い彼である。天才だけでなく、記憶力も抜群だったのは確かだろう。

意外と思われるのは、「カルメン」でおなじみのビゼーである。1861年というから、

22才の時の話である。ピアノの帝王リストが開いた内輪の演奏会に師アレヴィとともに招かれた彼。リストが書きあげたばかり



ジョルジュ・ビゼー（1838-1875）のイラスト

の難曲を披露し、「これを正しいテンポで弾けるのは、私とハンス・フォン・ビューロー（弟子で指揮者）ぐらいでしょう」と言ったところ、師に促されてピアノに向うと、その最も難しい部分を鮮やかに弾いてみせた。驚いたリストが楽譜を渡すと、初見のまま正確なテンポで弾いてみせて、一同をあっ！といわせたというのである。「若い友よ。私は間違えました。2人ではなく3人というべき。いや、公平にはあなたが最も奔放で輝かしい、というべきでしょう」と、リストは恥ずかしそうに言ったという。

.....  
【宮本英世氏プロフィール】1937年、埼玉県生まれ。東京経済大学経済学部卒。日本コロムビア（洋楽部）、リーダーズ・ダイジェスト（音楽出版部）、トリオ（現ケンウッド）系列会社社長を経て、現在は名曲喫茶「ショパン」（東京・池袋）の経営ならびに音楽評論、著述、講演、講座などを行う。著書は「クラシックの名曲100選」（音楽之友社）、「クイズで愉しむクラシック音楽」（講談社）、「喜怒哀楽のクラシック」（集英社）など多数。

同じフランスでは、サン＝サーンスの記憶力も有名である。神童として4才の時に作曲。5才でベートーヴェンのソナタを弾き、6才からラテン語・ギリシャ語・数学・天文学の原書を独学で読み始めた、といった天才ぶりが伝えられるが、10才でピアニストとしてデビューした時にはベートーヴェンとモーツァルトのピアノ協奏曲を弾いたあと、アンコールに応じて「ベートーヴェンのソナタなら、何でもOKです。楽譜なしで弾きましょう」と言ったとか。本当だとしたら大変な自信家であり、恐るべき記憶力を持っていたことになる。私にはどうも、嘘かハッタリにしか見えないのだけれど――。

そのほか、2才にして耳に入る民謡や軍歌を端から覚え、4才の時にそれが200曲になっていた。のみならずおもちゃのアコーディオンで弾いてみせたというマーラー。9才にしてウエーバーの「魔弾の射手」序曲を丸暗記し、自己流ながらピアノ用に編曲したというワーグナー。SL（蒸気機関車）に惹かれ、駅に出入りする列車・機関車の型番から運転手、時刻表、行先までを丸暗記したと伝えられるドヴォルザーク――などもいる。好きだからとはいえ、やはり記憶力がよかったということだろう。



## ターリヒの1941年録音『わが祖国』

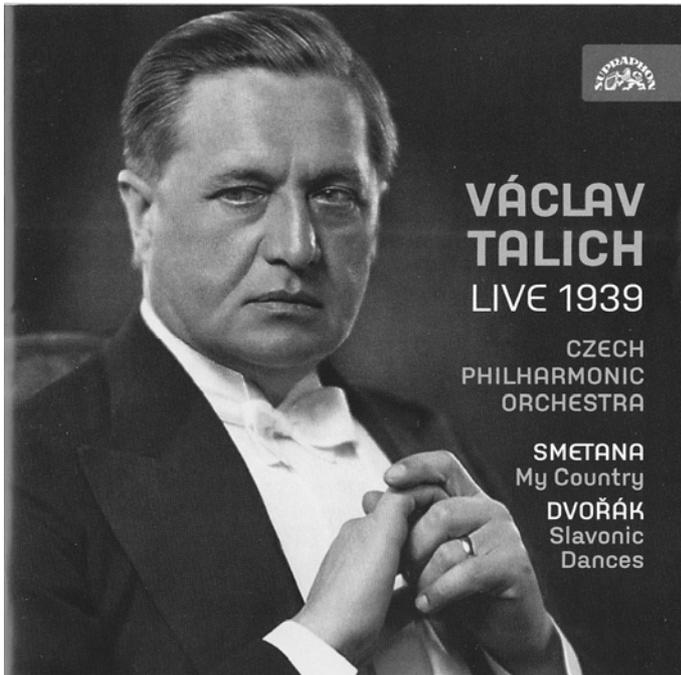
ターリヒ指揮チェコ・フィルによるスメタナの《わが祖国》と言えば、1954年録音が名盤として有名だが、最近、仲間が同コンビの1941年7月録音SP盤10枚組を手に入れたので、早速SPレコード・コンサートで披露した。司会を務めた筆者は、録音について調べているうちに興味深い事実気が付いた。



注目したのは1941年という録音時期である。1939年3月、ナチス・ドイツはチェコを強引に併合、当時チェコは占領下にあった。《わが祖国》はハプスブルク家支配下にあったチェコの作曲家スメタナが、1875～79年に祖国の自主独立の願いを込めて作曲した作品である。それは、かつて存在したボヘミア王国の王の居城ヴィシェフラドの主題（第1曲ヴィシェフラド冒頭のハープによる主題）が、第6曲ブラニークでフル・オーケストラにより壮麗に再現する

ことでも証明されるだろう。

実際、併合直後の1939年6月、ターリヒとチェコ・フィルはプラハで《わが祖国》を演奏。ブラニーク演奏後、聴衆は大騒ぎとなり、客席からはチェコ国歌が湧きあがった。このライブ録音は近年発見され、2011年CD発売された。このCD解説書によると、こうした事態にナチスは神経を尖らせ、翌年には第5曲ターボルと第6曲ブラニークを、より愛国心を刺激しない同じスメタナによる「チェコの歌」に差し替えるよう、ターリヒに命じたという。しかし、1941年のSP盤には両曲ともきちんと入っている。どうもナチスは重要な工業拠点となっていたチェコに対し「飴と鞭」的な政策を実施していたようだ。しかし、それも束の間。1942年ナチスが送り込んだ副総督ハイドリヒが暗殺されると、その報復でチェコは音楽どころでは無くなったのである。



60年の恩讐を超えターリヒの《わが祖国》を聴く。譜面のアクセント、クレッシェンドなど細部まで克明、そして生命力と高貴さに満ちている。作曲者と演奏者共通の願いは、音楽的感動を更に味わい深いものにしていった。

●スメタナ：連作交響詩《わが祖国》全曲 ヴァーツラフ・ターリヒ指揮  
チェコ・フィルハーモニー管弦楽団  
〈写真 前ページ〉

[英 Biddulph WHL049 (CD)]

1941年7月、ドイツ・エレクトロローラ社へのSP録音を1997年にCD化したもの。

以前からこのCDを所有していて、よくナチス占領下のプラハでこの愛国的な作品が録音できたと不思議に思っていた。同コンビは1929年にも《わが祖国》をSP録音しており、下記ライブと1954年録音を含め、都合4度録音した。

●スメタナ：連作交響詩《わが祖国》全曲 ヴァーツラフ・ターリヒ指揮  
チェコ・フィルハーモニー管弦楽団

[チェコ Supraphon SU4065 (CD)] 〈写真 左上〉

1939年6月5日、プラハ国民劇場でのライブ録音。近年、ノルウェー放送協会が中継放送用に収録したフィルム(フィリップスの光学式録音機を使用)が発見され、2011年チェコ・スプラフォンが一般発売したもの。

.....  
【板倉重雄氏プロフィール】1965年、岡山市生まれ。広島大学卒業後、システム・エンジニアを経て、1994年HMVジャパン株式会社に入社。1996年8月発売のCD「イダ・ヘンデルの芸術」(コロムビア)のライナーノーツで執筆活動を開始。2009年9月、初の単行本「カラヤンとLPレコード」(アルファベータ)を上梓。



-----  
**読者の皆様へ**

本誌では読者の皆様のご意見をお待ちしております。ご意見をお寄せになりたい方は最大1000字以内にまとめて、編集部へ郵送下さるか、下記のメールアドレス宛にお寄せ下さい。

メールの宛先(中島洋一編集長) : yoichi\_n@wa2.so-net.ne.jp

## アペカ電子オルガンコンペティションにみる中国

阿方 俊

中国では、高度経済成長に伴って電子オルガン界も一大成長を遂げつつある。先々月号で、中国の音楽大学電子オルガン科関係者 19 名が日本電子キーボード音楽学会に参加するなど中国パワーを見せつけられたことをレポートしたが、そのうねりの一つとしてコンクールにかけける情熱も見逃せない。ここで、2 月に香港で開催されたアペカ (APEKA=Asia-Pacific Electronic Keyboard Association の略称) 主催の電子オルガンコンペティションの概要をレポートしたい。

一般的に電子オルガンコンクールというと、「ヤマハ・エレクトーンコンクール」「ローランド・オルガンコンクール」「カワイ・ドリマトーンコンクール」のように楽器のブランド名や会社名を冠したものが多く、企業色が強い。しかし最近は、「九州音楽コンクール」のように企業主催でないもので電子オルガンをも対象としたものがある。



ベトナムからの参加者左から：リ・クイン、筆者、リ・タオ、藤代隆弘（日本）、ルー・ミン教授、グエン・フォンさん。

中国においても企業主催のものとして、「ヤマハ・エレクトーンコンクール」と中国の電子楽器メーカーである吟飛株式会社による「リングウェイ電子オルガンコンクール」があるが、最近、ハルピンで行われている「新芸杯 (New Art Cup) 電子オルガンコンクール」や「アペカ電子オルガンコンペティション」など、企業と直接的関わりのないコンクールが行われるようになってきている。

アペカは、アジア・パシフィック地域の電子鍵盤楽器の研究と普及を目的とした香港政府認可の音楽家を中心とした団体で、香港に本部を置いている。主席団と称する役員構成は、中国からの 4 名、北京 (王曉蓮)、北部 (王永剛)、西部 (譚芸民)、南部 (謝及) に日本 (阿方俊)、韓国 (イ・ウンスン)、台湾 (郭宗愷)、ベトナム (ルー・ミン)、タイ (井上和夫)、アメリカ (リチャード・グレイソン) の 6 名が加わった合計 10 名で構成されている。

今年 2 回目を迎えた APEKA 電子オルガンコンペティションは、2 月 8 日～11 日、香港芸術センターの中で行われ 140 名が熱戦を繰り広げた。昨年度の参加者は 90 名であり、ここにも中国パワーがみられる。中国と一口にいても、緯度として樺太と同じところに位置するハルピンからの参加者などは東京から香港へ行くよりもはるかに遠く、日本的感覚とは違いスケールが大きい。また今年度の特長として挙

げられることに、参加国が昨年度の中国だけだったものに今年は日本とベトナムの2カ国が加わり地域的広がりができてきたことがある。日本からは昭和音楽大学の院生（作曲専攻）、藤代敏裕さんが自作の「UNDULATION I（波動I）」を演奏して優勝賞を獲得し、ベトナムからはハノイアカデミー（ハノイ音楽院）で電子オルガンを勉強した3名が健闘し、リ・クインさんはバッハの「トッカータとフーガニ短調」を熱演した。

中国のコンペティションの特長として挙げられることの一つに、普及の観点からより多くの人に参加しやすくするために、電子オルガンを専門に勉強している人とそうでない人を大別して、年令も細かく分類されていて参加しやすいようにされている。

(1) 非専門グループ

児童 A (8 歳未満)  
 児童 B (12 歳未満)  
 少年 A (15 歳未満)  
 少年 B (18 歳未満)  
 青年 A (20 歳未満)  
 青年 B (22 歳未満)  
 成人 (22 歳以上)

(2) 専門グループ

少年 A (15 歳未満)  
 少年 B (18 歳未満)  
 青年 A (20 歳未満)  
 青年 B (22 歳未満)  
 成人 (22 歳以上)

\* 専門グループに少年グループがあるのは、中国の音楽学院では附属中学校（日本の中高一貫校）に電子オルガン科が設置されているからこのような分類になっている。



日本から参加した藤代敏裕さんの熱演

同時に、量的拡大による質の問題など今後解決していかなければならない課題もあるが、日本で電子オルガンが盛んになった1970年代を凌駕するパワーに注目したい。



コンペティション後の審査員記念撮影

(あがた・しゅん アジア・パシフィック電子キーボード協会主席 本会研究会員)

## インタビュー ベートーヴェン・ソナタ全曲演奏に挑む 北川暁子さん

中島：今日は、インタビューを快くご承諾いただきありがとうございました。ところで北川暁子さんは、高校生の頃から現在に至まで、ほぼ50年に及ぶ演奏家としてのキャリアをお持ちですが、その間に音楽に対する考え方、接し方に変化がありましたか？

北川：楽譜を良く読み、その背後に隠れた本質的なものを探し、音にして行かなければならないという思いは変わっていませんが、経験を積み重ねて行くうちに、いままで見ていなかったものが見えて来て、音楽をより深く捉えられるようになったように思います。また、自分が思ったことが、現実の音として奏でられ、お客がそれをどのように受け止めてくれるか、ということがとても大切なのですが、自分の思いと現実の音との距離を以前より縮めることが出来て来たと感じています。

中島：ところで、今、ベートーヴェンのソナタの全曲演奏に挑戦していますが、過去にもソナタの全曲演奏はおやりになっていますね。

北川：ええ、今回で3度目です。最初はデビュー20年目の38才の時で、その時は二週間で全曲を弾き終えています。デビュー30年目の時はブラームスをやりました。

中島：あの時は、ブラームスのコンチェルト2曲を、一晩で演奏しましたね。

北川：ええ、そしてデビュー40年に当たる10年前に、2度目のソナタ全曲演奏をやり、今回が3度目です。

中島：二週間でベートーヴェンのソナタを全曲演奏するのは大変ではありませんか？

北川：お客様にとっては大変でしょうね。私としては、短期間で一気に演奏しても、今回のように半年ほど期間をとって演奏しても、どちらでもいいんですけど。

中島：北川さんにとって、ベートーヴェンの音楽は如何なるもののでしょうか。

北川：少女時代、先生から、バッハは旧約聖書、ベートーヴェンは新約聖書というアドバイスをいただきましたが、その言葉の意味するところがだんだん解って来た気がします。ベートーヴェンは岩のように感じられ、時にはそこからしばらく離れ、他の作曲家の作品を弾きたくてなるのですが、しばらく離れていると、またベートーヴェンに戻りたくなります。ベートーヴェンの音楽はメロディーや、響が際立って美しいとかいう訳ではないのですが、音楽の本質的な要素が凝縮されて存在しているように思います。



北川暁子さん（ご自宅で）

中島：学生時代、作曲科の授業の中でベートーヴェンのソナタのアナリゼをしていた時、先生が「旋律作りならシューベルトの方が上手だし、転調ならばマックス・レーガーという名人がいる。しかし、ベートーヴェンにはそういうものを超えたものがある。」そしてワルドシュタインの終楽章や、31 番変イ長調の第一楽章のテーマを弾いて聴かせ、「不器用な男だが、この境地まで達したのだよ。これはベートーヴェンにしか書けない旋律だ。」とおっしゃっていました。

北川：分散和音や三度音型で出来たシンプルな旋律なんですけど、ハーモニーと併せて、なんとも言えない深い味わいを湛えていますね。ベートーヴェンを弾いていると、心のエネルギーのうねりを強く感じます。PP で書かれていても、そこに内的なエネルギーがだんだん蓄積されて行き、そして爆発する。作曲家の強い感情に圧倒されそうになります。

中島：私はベートーヴェンについては、世の中とも、自分自身とも、闘い続けた芸術家という印象を強く持っていますが、如何ですか。

北川：お父さんが飲んだくれで、禁治産者になり、10 代で一家の家長として家族の面倒を見なければならず、生活のためにしょうがなく貴族に頭をさげなくてはならないようなこともあったでしょうし、そういうことから貴族嫌いになり、自由主義、共和主義の思想に惹かれて行ったのでしょうかね。即興演奏の大名手だったのですから、もっと女性に持ていい筈なんだけど、可愛そうに失恋ばかりしていたし。

中島：苦難が絶えない人生だったのでしょうか。

北川：私は必ずしもそうは考えていません。結構、人生を楽しんでいたと思います。例えば、この前演奏した、作品 54 のへ長調のソナタなど、献呈者もおらず、自分の楽しみのために書いたと想像しています。また、気分転換に好んで自然探索をしたり、美味しいワインを飲んだり、コーヒーなど召使いに入れ方まで指示しています。創作面では、ここで満足するという事はなく、より高いものを求めて道を切り開いて行った人で、それは苦しく困難な行為ではあったでしょうが、同時に大きな喜びでもあり、楽しみでもあったのではないのでしょうか。

中島：そうかもしれませんね。それで人生の「楽しみ」という事が話題になりましたが、北川さんにとって音楽以外の楽しみとはなんのでしょうか。

北川：私にとって、特に、読書が欠かせない楽しみですね。文系の本が中心ですが。（ゲーテに関する書籍など何冊か取り出す）。暇な時間があると、よく、本を読んでいます。

中島：ところで、ロマン・ロランは、ゲーテの『ファウスト』について、「同じ高みに達してその詩劇に音楽を与えることが出来る作曲家は、ベートーヴェンをおいていなかったのではなかろうか」と語っていますが、ゲーテはモーツァルトの音楽の方を愛していて、モーツァルトにしかその資格がない、と考えていたようです。ベートーヴェンについては、「並外れた才能を持ってはいるが、彼の音楽は私を狂気の世界に誘う」などと言って嫌っていたようですね。

北川：ゲーテは飲んだくれの父親をもったベートーヴェンと違い、育ちが良く社会的地位も高く、自身も貴族に列せられ貴人達には礼をもって接していたので、粗暴な感じがするベートーヴェンとは相容れないものがあったのでしょうかね。

中島：話しを音楽に戻しますが、ベートーヴェンはよくモチーフを三回畳みかける書き方をしますね。昔、音大の授業でアナリゼをした際、数をひとつ減らし、二回で演奏して聴かせ、「これでも音楽的に成り立つでしょう。しかし、ベートーヴェンは、こうだ、どうだ、これでもか！と三回たたみがける。しつこいですね。」なんて、話したことがあります。

北川：でも4回はやらないでしょう。ですから、しつこすぎたり、ダレたりして音楽的説得力を失うことはないのです。でも、やはりドイツ人の音楽ですね。ベートーヴェンはウィーンに住んでいたけど、生粋のウィーン人の感性とは違うものがありますね。ブラームスもそうですけど。

中島：そのようなしつこさが、ドビュッシーなどからは、嫌われたのでしょうか。ところで、北川さんは、ベートーヴェン以外にも色々な作曲家の作品を演奏されますね。特に、好きな作曲家の名前を挙げていただけますか。

北川：シューベルト、シューマン、ショパン、ドビュッシー、ラベル、アルベニス、バルトーク、スクリャービン、プロコフエフの乾いたリリスズムにも、ちょっと魅力を感じます。

中島：レパートリーが広いですね。日本人の新作なども時々お弾きになるし。

北川：限られた親友とだけ深くつきあうという方もおりますけど、私は親友を大勢持ちたいというタイプなんです。その人の良いところだけを見て行けば、好きになれる人は大勢います。音楽に対しても、そのような接し方をしています。

でも、それほど好きでない作曲家もいます。例えば、リストにはあまり魅力を感じません。リストを弾いていると作曲者の手の内が見え見えで、深さを感じないのです。シュスタコーピッチもそれほど好きではありません。

中島：モーツァルトは如何ですか。

北川：勿論好きです。ただ、モーツァルトをコンサートの最初に弾くのは、とても勇気がいります。ちょっとしたミスでも音楽が壊れてしまいますから。そうかと言って、ベートーヴェンの後に持ってくるのもおかしいし。

中島：たしかに、北川さんはコンサートでは、モーツァルトをあまりお弾きになりませんね。

ところで、先ほど楽譜によく目を通し、その背後にあるものを読み取って演奏するとおっしゃっていましたが、その読み取り方が演奏家によって随分違うでしょう。

昔、ピアノ科の学生相手の授業で、ベートーヴェンの『熱情』を分析した際、何人かのピアニストの演奏を比較して聴かせてみたのですが、グレン・グールドの演奏は極端に遅く、学生達から「やめて下さい」という声が出ました。意味があっただけああいう弾き方をしているのでしょうか、ベートーヴェンが生きていたら、ぶん殴られそうな弾き方ですね。私には、あの演奏は認められませんね。

北川：わたしも、グールドの解釈には納得出来ません。

中島：昔、ストラヴィンスキーとアンセルメが音楽の解釈を巡って意見対立したことがあります。「指揮者は楽譜通りに演奏しない」とストラヴィンスキーが文句を言っている。しかし、私は作曲者自身が指揮をした『火の鳥』より、アンセルメの指揮した『火の鳥』の方が好きですね。作曲者の指揮はテンポが変わらず単調な感じがします。

北川：演奏家が作曲家自身さえ気がついていないものを、見つけ出すということもあるでしょう。ですから同じ作品を弾いても、演奏家によって違いがでてきます。でも、作品に命を与えるのが演奏の役割ですから、演奏家の自己顕示欲が表に出て作品を押しつけてしまうような演奏は認められませんね。作品解釈を巡って色々な意見が出て来るのは良いことだと思いますが。

（この後、ウィーン滞在時の思い出話し、西洋と日本の精神風土の比較など、色々な話題でお話しいただきましたが、スペースの都合で割愛します。）

中島：ところで、北川さんは今年の三月をもって、定年で東京芸術大学教授の職を退かれますが、その後何をされますか？

北川：演奏、研究、教育などやりたいことは沢山あります。

中島：ところで、現在の我が国の社会、経済状況は以前に増して厳しさを増し、若い人が音楽を生業として活動して行くのはなかなか大変になって来たと思いますが。

北川：ええ、父兄から「音大を卒業しても就職できるのですか？」などという質問をよく受けます。日本のクラシック音楽人口は少なく、それに比べ音大卒業生の数は多いですからね。それでも医者や弁護士などのように裕福な知識層の中には、まだクラシック音楽愛好者もかなりいるのではないのでしょうか。

中島：それはそうだと思います。しかし、平均的な庶民が足繁く音楽会に通うようになっていくかどうかとなると、なかなかそうではありませんね。音楽愛好者をもっと増やす努力が必要です。政治などはあまり当てに出来ません。

北川：昔から我が国は、文化にはあまりお金を出さない国でしたしね。

中島：確かにそうです。でも、80年代は、国家財政にゆとりがあったため、大学の研究助成金などは、少々ユニークな研究だと割に簡単にとれました。ところが、今は国家財政も窮乏しているため、文化予算だけでなく、教育予算もかなり削られて来ています。

北川：教育予算までケチるようになってしまったら、この国の将来はどうなるのでしょうか。

中島：教育予算までは無理としても、若い人達を育成、支援し、その一方でそういう人材を活用し、音楽愛好者の層を広げて行く活動は、この会がずっと持続してやって来たことですし、これからも続けてやらなければならないと考えています。骨の折れることですが、社会的、文化的に必要で意義のある活動と自負しています。

北川：そうですね。私もそういう活動を手助け出来るよう、これからも、みなさんに協力して行きたいと願っています。

中島：今日はありがとうございました。

インタビュー担当 中島洋一（本誌 編集長）

（2011年3月19日 北川暁子宅にて）

※なお、持参した録音機器に不具合が生じたため、手書きのメモから原稿を起こしました。

作曲 北條 直彦

3月16日、当会の重鎮でもあるピアニスト、北川暁子のリサイタルが東京芸術大学奏楽堂で開催された。退任記念コンサートとあったがこれは北川のライフワークの一つでもあるベートーヴェン・ピアノソナタ全曲連続演奏会の第四夜でもあった。演奏曲はベートーヴェンの初期のピアノソナタ第10番ト長調（作品14-2）中期のピアノソナタ第22番ヘ長調（作品54）がステージ前半、後期のピアノソナタ第29番変ロ長調“ハンマークラヴィア”がステージ後半であった。ここで少し曲について述べる事にしよう。

前半の二つのソナタの中、第10番ト長調は子供時代のピアノのお稽古ではお馴染みのソナタアルバム第一巻中にもある曲で、ベートーヴェンのピアノソナタへの入門曲の一つにも数えられる曲である。ピアノの素養のある方々ならば子供時代に勉強した記憶が少なからずあるのではなかろうか。それとこの曲は第一楽章のテーマでの二つの声部のはっきりした対立が面白い事から「夫婦喧嘩」と云う渾名で呼ばれていた曲だと云う事も付け加えておこう。曲想はモーツアルト的な可愛らしさがあり、それでいてベートーヴェンの構成と様式感が完成されつつあった頃の佳曲と云って良い。

次の22番のソナタは前後に“ワルドシュタイン”と“熱情”と云った二大ソナタに挟まれている二つの楽章のみの小曲で、第一楽章はソナタ形式ではなく、研究者の間では楽想にもさほどの特徴的、個性的な所も見当たらない平板さからか評価はあまり良くはないようだ。

第2ステージの“ハンマークラヴィア”はベートーヴェンのピアノソナタ中最大の曲。4楽章からなり終楽章には延々と続く大フーガが配されていて演奏時間は悠に40分を超える交響曲並みの長大な曲で、演奏家にとってもベートーヴェンのソナタ中最も難しい部類に位置する曲でもある。第1楽章は規模の大きいソナタ形式、第2楽章はスケルツォとあるがベートーヴェン独自の自由な形式感によっている。第3楽章アダージオは変奏を含む思索的な緩徐楽章。第4楽章は終曲で序奏を持った前述の通りの長大なフーガでソナタ的展開を持つ難曲。それでは次に北川の当夜の演奏について触れて行こうと思う。

まずは前半の二つのソナタに関してだが、ト長調の10番のソナタでは一楽章の第1テーマの表情を寧ろモーツアルト風可愛らしさで捉えるのではなく一步距離を

置いた中間距離での捉え方がこの曲の様式をしっかりと客観的に我々に示してくれていたと云える。演奏全体では平常心の自然な流れの上での様式観として受け取れたと言えよう。次のヘ長調22番のソナタでは第一楽章の平板な気怠さを第二楽章（終曲）では緊張感を伴う快速テンポで一気に弾いてのけ、吹き飛ばしたのは流石であった。この対照的な演奏がこの曲の価値を高めたのではないかと思えるくらいである。

第2ステージの“ハンマークラヴィア”では第一楽章の出だしは通常より幾分早めのテンポで弾かれた。その為か第1テーマの和音部分、右手最上声の旋律線が明快に聴き取り難かったと云う点はあったとしても（普通の日本人の女流ピアニストの手の大きさでこのテンポの場合、明瞭に上声を出すには何らかの工夫やアレンジが必要なのもかもしれない）、全体としてはベートーヴェンの演奏で陥り易い構造偏重主義的頑さにならず、寧ろ、自然な感情の流れを曲の持続の中に充分溶け込ませていたのは心地よくもあった位であった。それは肩肘張らない普段着の自由闊達なベートーヴェンの演奏であり、演奏終了後北川が短いトークの中で述べた「ベートーヴェンを楽しめる様になった～」の言と二重写しとなる。第二楽章のスケルツォも対照的要素を強調しすぎず究めてバランスの良い平明さで次のアダージオへの橋渡しとしての役割を果たしていたようだ。第三楽章のアダージオは、深く、思索的な曲と云われている。ここでは北川のピアノは、時として感傷的に陥り易い右手の旋律に対し、節度を保った表情付けにより曲の構造美を寧ろ高めていた様に思えた。

終曲では、序奏の後の主部のフーガは通常のテンポより速く弾かれ、スピード感溢れる演奏は、次々と現れる波、風を巧みに乗り越えて行く水上スキーをさえ連想させる程であった。しかし心残りなのは後半、終わり近くになってからちょっとしたミスによる持続の中断があった事である。このまま走り抜けていれば北川の、充分、個性的でもあり、爽快でスピード感溢れる楽しめるベートーヴェンが完成する所だっただけに頗る残念でならない。次の機会があれば是非、やり残した仕事を実現して欲しいし、また期待もしたい。演奏会を通して筆者が感じた事は、例え事件が起きたにせよ、この日の三つのソナタを通して彼女のベートーヴェン観は我々に抵抗無く、自然に伝わって来たし、その事は多様なベートーヴェンの在り方にとっても大いなる収穫であったとも思えた事である。

2012年 3月22日（ほうじょう・なおひこ）本会公演局長 記

## 1、 春告花・三景とトランペット・ソロ

薄明かりの中、実のない枯れ木が1本、静かな立たずまいで息をひそめている。ヴァイオリンの横に和服の男性が一人、凜とした気迫をみなぎらせて「その時」を待っている。舞台下手奥にピアノ・・・、この曲の始まりから消滅までのすべてを見通しているかのように待機している。観客席の空気がフェイドインしてゆるやかにステージ方向に流れはじめると、「春の午後、幼き日、静謐の時、花の影・・・」と朗誦が開始される。詩人の呼吸はヴァイオリンの弦と共に響き合う。

「時すぎ、いまはまだ、夢幻と化す、花の影、かなしく振り向く、花の影・・・」と続けられるとヴァイオリンはさらに静かに、やがてアグレッシブに歌い始める。そしてピアノが全曲を示唆し、黒衣（くろこ）のような花道家がクライマックスで「満開の桜の枝」を花瓶の枯れ枝に加えた時、人々の心は春の光の中に溢れ出て、「春告花・三景」橘川琢作曲を味わい尽くす。出演はヴァイオリンを戸塚ふみ代、ピアノ・森川あづさ、詩唱を木部与巴仁、花道家として上野雄次。

冬が去り、淡墨桜の思い出とともに戻ってくる春の華やぎを、出演者と観客がそれぞれの心に映る桜花に象徴して楽しんだ。やや饒舌なのが気になったが（詩・櫻木暁雪）、今という時代にはこのくらいおしゃべりな方が「つながる」のであろう。花道のパフォーマンスが観客とホール全体に春を呼び込む事に見事に成功した。

第2幕2番目の「トランペット・ソロ」は「Talk to me」というタイトルそのまま、トランペットおたくの、やや寂しげな男がトランペットをいじりまわして音と遊ぶ演目だった。ジョン・ケージのピアノのように冒険的で過去になかったような新たな表現を試みたわけでもなく、緊張感をはらんで楽器と対峙するわけでもなく「ひとりぼっちの男がトランペットに遊んでもらっている」という「平和な主題」である。観客にとって愛すべきトランペット・プレーヤーは、もっと聴きたいなあという所でステージから去った。小さくまとめあげた技量は作曲家・小西徹郎の並々ならぬ奥行を暗示。一見、孤独な男A、という個性とともに存在感を示した。

## 2、若い二人が円熟した作曲家に挑戦した独奏十七弦による三章

「独奏十七弦による三章」助川敏弥作曲はほぼ完成されている序破急の三章に、地歌舞を配して提示された。舞の出演は花崎さみ八（花崎杜季女門下・名取）で美しい立姿が印象に残った。第2章の雨竹のテーマでは琴が極限までダイナミックに鳴り続ける中でも、これに動ぜず構えに品格を保っているところが舞踊家の心の有

り様を主張して面白かった。琴の演奏（出演は池上亜佐佳）と地歌舞がそれぞれの力を譲らず、かといって遊ぶ余裕はもちろん持ち合わせずに拮抗していく様子は興味をかきたてる。

やがて三章の「飛雁」に入ると曲も急を増して、強い印象のエンディングに至る。技能レベルの高さをもつ若い演奏と、美しい若さをもつ舞踊の所作・・・このコラボレーションは或る意味では課題を残した。扇を円形曲線で描くように動かすところには、止まることのない連続した上肢のローテーションが必須であろう。これは地歌舞独特のテクニックで「らせん動作」と呼ばれ、舞子さんの「京舞」の基本となっている。観客に錯覚を与えて「身体の重さ」がないかのように感じさせ、女性ではなく天女または魂に出会っているかのような舞台を実現する技法である。琴にもよりしなやかな演奏が求められる。もしも二人の間でさらに上級の技能が実現すれば、この曲は完成度の高い「作曲の深部」まで観客を誘うことだろう。たとえば琴には「残月」のしなやかな演奏技法、地歌舞には「名護屋帯」の柔らかな表現など。

とはいえ筆者と同じように年を重ねた観客がいたとすれば、若い二人がチャレンジした偶然には胸に熱いものを感じたことだろう。この完成した作曲に対して物おじせず挑戦したのである。動く身体や荒らぶる呼吸を体感すると、人は別の次元に連れ去られてしまうからである。

### 3、企画の失敗か、独奏尺八の為の — 悲 —

高橋雅光作曲の標記の音楽は坂田誠山の尺八によって上演された。この作品は舞踊のコラボレーションが不要な上演形態で提示された。1979年にモダンダンスと共演した経緯をもつために、今回も名乗りを挙げて清水フミヒト氏のダンスをつけたという解説を読んだが、この判断には誤りがある。作曲そのものはきわめて優れた作品で、演奏者の深い理解と解釈によって聴衆に感銘を与えた。これからも上演回数を増やしていただきたいと願うものである。しかし一曲が完結しており、独自の音楽世界を構築して「蟻（あり）の入り込む隙間もないほど」仕上がっているだけに、ダンスは雑音になってしまった。

今回のモダンダンサーは経歴もあり技術的にも優れているだけに、気の毒な役回りとなった。現代舞踊の中に暗黒舞踏の技術も取り込んで、彼なりにいろいろ工夫して取り組んでいたが、企画のミスマッチまで補うことはできない。またダンサーの動きにも尺八の音色に対する妥協がなく、清水氏の所作（ロダンのいうムーブマン、イサドラ・ダンカンのいう動きの源）には洋楽、クラシックや電子音楽、たとえばエニグマや坂本龍一の方がぴったり当てはまるのである。これに対して「悲」の尺八は全く「とりつく島を与えない」ほど厳格に完結していた。両者の距離感や主題についての議論討論がステージ上に展開すればまた違った見え方になるかも知

れないが……。異分野が一緒にやればコラボレーションというわけではない、という当たり前の前提について考えさせられた。

#### 4、ODDECH I ZYCIE ～序章～、そして「春雪夢浮橋」

東北大震災のために失われた命を追悼して日本各地でレクイエムが上演された。本コンサートでは仏教の杉山智之住職による読経および散華が行なわれた。ステージ中央に据えた「呼吸と生命」を表わす標記の主題は、暗闇の中のキャンドルサーブिसで始まった。作曲は浅香満、振付は酒井麻也子、パフォーマーは打楽器（ハンドベル他）とダンスを受け持つ10名で行なわれた。伊嶋理恵子、内垣絢子、神田麻衣、曾山美穂、曾山ゆき、武田麻衣、鳥居久美子、福田葉亜都、元田絢子、森岡真弥、衣裳はエジプトか西アジアを連想させた。演奏は最初からコラボレーションを意図して構成されているかのように音楽とパフォーマンスに各々の出番と役割を与えていて、パフォーマーたちは十分に演じていた。観客も澄んだハンドベルの音色と人間の息づかいに、彼岸へと去った人々の存在を感じたことであろう。散華は多くの悲しみに対して慈悲と救い、そして慰めを与えた。しかし、上演についての空間構成には隙が多かった。再演時には手直しも考えられる。ステージに緊張感をみなぎらせる中盤では、群舞の「二群構成法」を採り入れるとよい。たとえば舞台上に一群、客席通路にもう一群という風に。序盤でロウソクをもって歩くのとは違って、ホール全体に緊張感をもたらす意図で空間構成を使用する。

これに対して高橋通の一弦琴「春雪夢浮橋」は一弦琴の奏者1名とモダンダンサー1名のシンプルな舞台であった。上方特有の主題、鳥辺山の心中道行を情緒たっぷりに唄ったものである。日本人の伝統的な心象風景、とくに男女のラブストーリーの極限を描いた名品である。「1人来て、二人連れ立つ極楽の……」で弦と唄が始まると、この極楽が最終章には「凄惨な」血の海の心中場面へ変わることを知っている観客は、それぞれの心に胸の疼きを感じる。人はそれぞれにラブストーリーを持っている。恋の甘さも苦さも、あるいは永い年月、封印してきた秘密も……。一弦琴の音色に導かれて徐々に解き放たれていく。ダンサーは白いスカートで序の部分で摺り足で横移動し、舞台奥の下手から上手へ静かに動いていく。観客にたっぷりと弦の響きと唄物語を聴かせる静けさである。白い衣裳のフレアーが微妙に動く恋人たちの「心中を決意した」純粋な想いが象徴される。中盤から「恋という字に身を捨て小舟、どこへ取り着く、しまとてなし」で場面はダイナミックな官能の世界へ変わる。所作は創作した長い一連の動きの流れにまかせて、動的な動きのフレーズを次々に繰り返すことによって、恋という運命の渦中にある女を表現した。一弦琴と白い上肢、たおやかな胸元の波立ち……。上品でありながら浪打つ情緒を大きな起伏で表現した。やがて最終盤の異形ともいえるアンバランスなフォルム（静



## 『動き、舞踊、所作と音楽』を終えて

昨年10月になって急遽コンサートをすることになり、表題のタイトルの会を企画しました。この企画に当たっての目標は、本会の名前にある「舞」の部分の活性化にあり、内容としては「舞」を拡大解釈して、所作、動きと音楽の組み合わせということにしました。このような大風呂敷を広げたようなコンセプトで、果たして出品参加希望者があるかどうか、どんなものが上演されることになるのか、お客様に来て頂けるかどうか、心配なことは沢山ありました。

出品募集をしましたところ、幸いにも7つの応募作品がありました。企画側としては、夫々の作品が、どのようなものになるのか、全く見当のつかないものもあり、心配しましたが、こういう企画を待ち望んでいらっしゃる方もあり、面白い会になりそうだと、だんだん楽しみになってきました。年が開け、会当日が近づくとつれ、実際の舞台はどうなるのか、照明はどうするのか等々、今まで経験した音楽コンサートには見られなかった問題が数々出てきました。会場の舞台技術者と出品者の協力で、何とか様子が見えてきたのは、当日の舞台練習になってから、という際どいものでした。集客状況も見当がつきませんでした。音楽情報雑誌の無料ご招待にはある程度の応募があり、このような企画に関心を抱いていらっしゃるお客様も少しはいらっしゃる事が分かりホッとしました。

個々の作品についての評は国枝たか子先生から頂くことになっていますので、作品の様子をざっと書いておきます。また当日の写真は、この雑誌冒頭のグラビアページに掲載されています。

第1番目は、浅香満氏の『ODDECH I ZYCI』浄土宗の僧侶も出演するという鎮魂の意味を込めた儀式的な雰囲気のある作品。2番目は、橘川琢氏の『叙情組曲《日本の小径》補遺より「春告花・三景」』という詩唱と生け花を伴った作品。3番目は、高橋雅光氏の『独奏尺八の為の＝悲＝』で、古典的な色合いのある現代邦楽と現代舞踊の組み合わせ。4番目は、小西徹郎氏の『"Talk to me" for Trumpet solo』で、これはトランペットの音を電氣的な処理をし、それを動きの得る演奏をするもの。第5番目は企画者である小生の『春雪夢浮橋』で、現代舞踊。第6番目は『革命幻想歌』。演劇的な要素のある詩に基づいた動きと音楽の組み合わせ。最後は助川敏弥氏の『独奏十七弦による三章』と地歌舞。

どれも、作者、パフォーマーの思いが伝わって来る作品であったので、ある程度の責任が果たせたと思う。この試みが、日本音楽舞踊会議の中のコンサートの一つとして続けられれば、と思っています。

コンサート実行委員長：高橋 通



## 現代音楽見聞記 (14) 2012年2月

音楽評論 西 耕一

筆者にとっては演奏会への出席が激減した月になってしまった。上旬のA型インフルエンザ罹患とその後遺症が思いのほか長引いた。体調に不穏な動きの出始めたのは3日。内藤彰・東京ニューシティ管の山田和男（一雄）のおほむたからの旋律性を際立たせたピリオド奏法的アプローチに感銘を受けたが、寒気があった。4日楽しみにしていた広上淳一・東フィルの山本直純特集マチネは寒気のため諦めたが、友人主催の「思想時代」による夜の終わりの四重奏曲と同編成の新曲初演の夕べへ。津田宗明の吉祥天礼賛はアジアの反復性を思う。川上統の人魚の財布は鮫の卵が孵化する様子を呆気なくも瞬間燃焼に委ねる。木下正道の昼の眠りの群島VIは同シリーズと同じく、シャリーノの影響が濃いものの独特の持続力があるのは川上と好対照。とその夜、39度の高熱でインフルエンザと判明。イナビルを吸引でそのまま自宅静養へ。5日カルチエミュージコ主催のアティレSQによる湯浅、三善、武満、一柳、西村も行けず。しかし薬が効いて解熱後2日となり、マスクで厳重に防備して友人とも話さず7日藝大佐藤淳一博士後期課程学位審査会「ルチアーノ・ベリオの肖像 III」へ。シュマンIV、コントラプントゥクスXIX、カンティクム・ノヴィッシミ・テストメンティ（日本初演）、シュマンVIIという全曲サクソ主役の大編成。佐藤淳一独奏企画構成選曲、安良岡章夫指揮、東混、博士学位審査会特別オケ。藝大ならばこのくらいやって欲しいという意義ある仕事。

8日旧奏楽堂でアンサンブル東風13回定期。スペイン特集はトゥリーナ、デ・パブロ、オアニセッコの日本初演、森田佳代子の初演。10・11日は神奈川フィル×和楽器スクランブルルーレット@厚木として円光寺雅彦指揮神奈フィルが黛敏郎BUGAKUや武満ノヴェンバー・ステップス他を無料招待（震災延期公演の振替）。よって11日鈴木俊哉のNewTrioリコーダー・箏・笙には行けず。12日アンサンブル・ノマド第43回定期接触の様相Vol.3政治の季節列伝風には、ベリオ、フィリディ、ウォルフ、ジェフスキー、高橋悠治、松平頼暁を取り上げた充実の内容。同日佐渡裕指揮シエナWOの吹奏楽版タルカス・編曲吉松隆・挟間美帆は興味あったが完売。

15、16、17、18、19日は新国にて松村禎三の歌劇沈黙上演。演劇畑の宮田慶子がオペラ初演出。人物造形で個々の存在にスポットがあたった。下野竜也・東響の繊細精緻な解釈も魅力的。だがオケが舞台に乗り切らず別室よりのスピーカー中継となった楽器もあるのは今後心にとめるべき問題。23日東京フィルは尾高忠明が松村禎三前奏曲と武満徹遠い呼び声の彼方へ!を取り上げる。24日も尾高東フィルで同日尾高賞受賞の発表があった惇忠の肖像、尚忠のフルート協奏曲。高木綾子のソロがこの曲のシンプルだが奥深い美をより一層輝かせてくれた。

27日東京音大の教室で行われたヴィオラアンサンブルVIVAVIVAVIOLAにて江原大介の力強い筆致のヴィオラ四重奏曲(委嘱初演)を聴く。29日双子座三重奏団やシャコンヌ佐村河内守弦楽作品集CD発売記念コンサート等あったが筆者祖母危篤の報を受け病院へ走った。

(にし・こういち 賛助会員)

## 福島日記 (9)

作曲 小西 徹郎



先日学校の卒業式があり、私は仕事でみんなを見送ることができなかったのだけど心から「おめでとう」を伝えたい。

このたび卒業した学生たちは2年前の9月新潟で行われた私の特別講演のときに出会った。当時はまだあどけないところもあり夢と希望を持っていた。そして震災を経て5月から非常勤講師として勤務し始めて2年生になった彼らはちょっと沈んでいるようにも見えた。やはり業界就職、音楽家として生きていくことへの恐れと不安、様々な要因が彼らを沈ませていたのだろうか？どうすれば立ち直れるのだろうか？私はこの1年かなりの頻度で悩んだ、いや、考えていた。

若い頃の不安はどうしても通らなければならない関所のようなもの。学生から社会人、ましてや音楽家への道というのはどうしても敷居が高い。その中で私は彼らと共に学びながら、やはり共に行動し制作し、ということをしていくことでしか学生の不安を取り除くことはできないと感じていた。そこでやっと卒業前になってからT-Projectなど学生と共に仕事をする、ということをはじめた。彼らが卒業してももし希望すれば共に仕事をしていけるように働いていきたい、そのように思う。

先日の卒業式の際、教務の小島誠一先生からメールがきた。彼は学生にとっても厳しい。だが彼の言葉には愛がある。卒業式の際、保護者の方から「貴重なお言葉、真剣に向き合ってください感謝いたしております」と言葉をいただいてそのことがとてもうれしかった。卒業生はこれからみんなどうなっていくのだろうか？私は今後も見続けて、声をかけていこうと思う。そんな卒業式の翌日、エンジニア専攻の学生から就職の内定をいただいたととてもうれしいニュースがきた。



私は思う、人生は最後の最期にならなければ結果はわからないと。私自身も一般大学を卒業後、13年間企業の会社員として勤務していた。

37歳になってやっぱり音楽で生きていかなければならない、と一念発起して退職し音楽の道に身ひとつで飛び込んだ。人間、人生はいつどこでどうなるか

わからない、だから常に可能性を見出しながら決してあきらめず進んでいってほしいと心より願っている。

4月、新学期が始まり、もう間もなく新入生が入学してくる。私は今年は2年目となる。今年は昨年より少し人数も多く、私もとても楽しみだ。もう入学前から小島先生を慕ってWasabiプロダクション業務に参加している学生もいて、新入生のやる気や先の展望がとても明るく感じる。今回新しい授業についても提案したり計画を作ったりして新入生たちがどんどん吸収していってくれることを願っている。また別枠ではあるが、理系の専門学校でも新たに講義の依頼をいただき、その準備も進めていてそこでも新たな若者との出会いもとても楽しみである。そんな日々が私はとても幸せである。今度2年生になる学生たち、入学した当時から卒業後のヴィジョンを持つように伝え続けてきた。個人個人に接し、自分自身をどうプロデュースしていくのか？第三者である私はひとりひとりに可能性に近づけるように会話をし続けた。今後もずっと見守ってアドバイスを続けていこう。

今福島は3月11日、震災から1年を経て今後どう変わっていくのだろうか？月刊「音楽の世界」2012年3月号の福島日記において私はかなり現実を直視したものを、私が福島で実際に感じていることをまっすぐに書いた。だが、学生と接していると私が書いた「被災意識のなさ」このことに逆に疑問を感じるようになった。学生たちは今おきている諸問題について福島以外の地域から疎外感を感じている、そのことが彼らと話して伝えてくるのだ。

今被災地のがれきの受け入れ先について大きな問題になっている。誰も手を挙げない、それどころか測定をしてもなお、信じられず、根拠のない状態で拒否をしている。東北は危険だ、という心理が集団ではたらいっているからだ。私は思う、この東日本大震災はそして東京電力福島第一原子力発電所の事故は、もうすでに東北、福島だけの問題ではないし、日本だけの問題でもなく地球上の問題であると。徐々に整備されてくる数値や判定の基準を冷静に受け止めて放射能測定の結果、問題がないのならがれきの受け入れを日本全体で行っていくことが大事だと。それは国にも責任はあるが、国民全体が助け合いの精神を軸に行動をおこしていくことが最も重要なことであると私は思う。

よく「人は他人の不幸が好き」といわれる。これは個人の性格とは異なるある種の本能のような気がする。今、日本人すべてが危機を乗り越えられるかを試されている。東北や福島だけではないのだ。日本人全員が他人の不幸を遠目にみるのではなく、日本人全員が今おかれている「現実」に目を向けて助け合い、行動していくことが一番大事なのだ。

(こにし・てつろう 作曲会員)

# "Fresh Concert"- CMDJ 2012 -

## ～より豊かな音楽の未来をめざして～

2012年4月13日（金） 18:30 開演

すみだトリフォニーホール 小ホール

主催：日本音楽舞踊会議／月刊『音楽の世界』

### 《ごあいさつ》

昨年のコンサート開催一ヶ月前に、我が国は東日本大震災、福島原発事故という未曾有の大災害、大事故に襲われました。多くの方々が震災で亡くなられ、一年経過した今でも復興への道程はまだまだ遠く、被災者の方々のご苦労を思うと心が痛みます。しかし、今回の災害を通して、人間のもつ暖かさ、やさしさ、逞しさ、といったものを再認識し、勇気づけられたのも事実です。このコンサートも昨年は開催自体が危ぶまれましたが、その危機を乗り越え、今回で10回目を迎えることが出来ました。

本会は、音楽文化の土壌を耕し、よりよい音楽文化環境の実現のため、機関誌『月刊：音楽の世界』の発行、コンサート、研究会開催など、地道な活動を積み重ねてまいりましたが、今日の、厳しい社会、経済状況の中で、若い才能を発掘、育成することも、長い歴史を重ねて来た音楽文化団体として果たすべき社会的、文化的使命の一つと考え、2003年度から毎年3月下旬～4月上旬に『Fresh concert』を企画してまいりました。

10回目を迎える今回は、15人の若い音楽家達を世に送り出しますが、伴奏者を含めて20人の方々が、このコンサートを目指して研鑽に励んでまいりました。

いま、我が国は大震災からの復興など、様々な困難な課題を抱えておりますが、そのような時だからこそ、若い音楽家たちの熱演が、皆様に感動と勇気を与えてくれることを願っております。そして、演奏する者と聴く者が音楽を通して心を通わせ、明日への希望を紡ぐことが出来れば、この上もない幸せと存じます。

どうぞ、若い音楽家たちの奏でる音に耳を傾け、暖かい拍手をもって、音楽界という大海原への船出を祝って上げてください。

日本音楽舞踊会議	代表理事	助川敏弥、深沢亮子
	理事長	戸引小夜子
	公演局長	北條直彦
	コンサート実行委員長	中島洋一（文責）



## 【出演者略歴】



### 原田 智代（はらだ・ともよ：ソプラノ）

神奈川県出身。平成22年度国立音楽大学卒業。  
2011年大学院オペラ《フガロの結婚》ではバルバリーナ役で出演。  
平成平成24年度国立音楽大学大学院修了。  
牧山静江、小泉恵子氏に師事。

### 神原 あゆみ（かんばら・あゆみ：伴奏ピアノ）

国立音楽大学器楽学科ピアノ専攻卒業。同大学院修了。ピアノを、大場智子、大西慶子、花岡千春の各氏に師事。室内楽を長尾洋史、徳永二男各氏に師事。霧島国際音楽祭、北九州インターナショナルミュージックアカデミー、ニース国際夏期講習会、アカデミー・ピアノスティック・インターナショナルなど多くのマスタークラス受講。日本アンサンブルコンクール入選。大学院修了後、母校国立音楽大学にて、小泉恵子女史の日本歌曲のクラスにて伴奏助手を務める。現在、ソロ、室内楽、声楽・器楽・合唱の伴奏などの分野で活動中。



### 山上 由布子（やまがみ・ゆうこ：ピアノ）

神奈川県出身。中学からピアノを始める。  
2011年フェリス女学院大学音楽学部演奏学科卒業。  
学内演奏会に出演。  
ピアノをこれまで、野田清隆、橘高昌男、北川暁子の各氏に師事。



### 箕浦 綾乃（みのうら・あやの：ソプラノ）

国立音楽大学音楽学部演奏学科声楽専攻卒業。学部3年次より歌曲ソリストコースに在籍。卒業時に卒業演奏会に出演。同大学大学院声楽専攻オペラコースに進み、昨年10月に大学院オペラ《フィガロの結婚》にケルビーノ役で出演。今春、同大学院を修了。  
これまでに、声楽を、荻野砂和子、小泉恵子の各氏に師事。

### 永井 英里香（ながい・えりか：伴奏ピアノ）

国立音楽大学演奏学科鍵盤楽器専修ピアノ専攻卒業。  
卒業時に卒業演奏会に出演。同大学院修士課程修了。  
服部乃りこ、花岡千春の各氏に師事。





**西尾 自由梨 (にしお・じゅり : ピアノ)**

4.5歳よりピアノを始める。

県立西宮高等学校音楽科卒業。現在東京音楽大学2年。

今までに青井彰、今岡淑子、北川暁子、松本愛、海老原直美に師事。



**城 佑里 (じょう・ゆり : ソプラノ)**

国立音楽大学附属高等学校を経て、平成22年国立音楽大学演奏学科声楽専修卒業。在学中に学内選抜によるソロ・室内楽定期演奏会、卒業演奏会に出演。東京都同調会新人演奏会出演。JMC・コンサート出演。第80回読売新人演奏会に出演。

平成24年国立音楽大学大学院音楽研究科声楽専攻オペラコース修了。大学院在学中大学院オペラ、モーツァルト作曲歌劇「フィガロの結婚」に伯爵夫人役で出演。

これまでに声楽を羽根田宏子、岩森美里の各氏に師事。

**斎藤 亜都沙 (さいとう・あづさ : 伴奏ピアノ)**

国立音楽大学附属中学、高等学校を経て国立音楽大学鍵盤楽器専修ピアノ科卒業。同時に鍵盤楽器ソリストコース修了。ピアノを五十嵐稔、梅本実の各氏に師事。また学内特別レッスンにてダン・タイ・ソン、ミシェル・ベロフ、ナターリヤ・トゥルーリ、エヴァ・ポブウォツカ、ミシェル・ダルベルト、の各氏に師事。第86回ソロ室内楽定期演奏会出演。学部3・4年次、岡田九郎記念奨学金授与。また国内外研修奨学金を得てモーツァルトウム音楽アカデミーにてユラ・マルグリス氏に師事。現在、国立音楽大学大学院修士課程に在籍。ピアノを安井耕一氏に師事。



**粟津 惇(あわず・まこと : ヴァイオリン)**

東京都出身。桐朋学園大学卒業、同研究科修了。ヴァイオリンを小森谷巧、篠崎功子、室内楽を藤井一興、豊田弓乃、藤原浜雄、東京クァルテットの各氏に師事。在学中は桐朋学園室内楽演奏会、桐朋アカデミーオーケストラ演奏会など出演、コンサートマスターもつとめる。全日本学生音楽コンクール、日本クラシック音楽コンクール全国大会などに入賞。奨学金を得てウィーン国立音楽大学マスターコースに参加、エドワード・チェンコフスキー氏に学ぶ。特別賞受賞。イタリア

文化会館「日本におけるイタリア2009・秋」にてビバルディのドッペルコンチェルトを演奏、評価を受ける。

## <Pensieri Brass Quintet>

高荒海 (Tp. I) / 三嶋雪音 (Tp. II) / 古田龍平 (Horn) / 青木昂 (Tbn.) / 高橋秀和 (Tuba)

2009年、井手詩朗氏の薦めにより結成された、国立音楽大学出身で構成された金管五重奏団。

Pensieri とは伊語で“思慮深く”という意味で、より新しく、今までの金管五重奏にはないパフォーマンスを取り入れ、視覚的にも聴衆を魅了する演奏を目標としている。

クラシックやポップス、ジャズや演歌等、幅広く対応し、金管五重奏の持つ明るく重厚なサウンドを追求し生かしつつ、様々なニュアンスを取り入れながら演奏を創るように心掛けている。

第11回大阪国際音楽コンクールファイナリスト、国立音楽大学第84回、第87回室内楽定期演奏会に二年連続出演、年に数十回にも及ぶボランティア活動から各地演奏会公演まで、積極的に活動が続いている。

2011年シンガポール共和国からの招聘により演奏会・ワークショップ開催。関東を中心として地方の学生にも金管楽器の指導も行っている。2010年、2011年にはシンガポールの学生にも指導を行った。The 2011 Midwest Clinic に国立音楽大学ブラスオルケスターのメンバーとして出演。



---

### 柏木 沙友里 (かしわぎ・さゆり : ソプラノ)



国立音楽大学音楽学部演奏学科声楽専修を卒業、同時にオペラソリストコース修了。同大学院音楽研究科声楽専攻(オペラコース)卒業。第80回ソロ・室内楽定期演奏会に出演。明治安田生命2008年度「音楽学生奨学生」に大学代表で認定される。

日本演奏連盟主催、宮廷歌手シルヴィア・ゲスティ教授による、「声楽家のための公開マスタークラス」の出演オーディションに合格。ウィーンにて、2007～2009年「シルヴィア・ゲスティ教授によるマスタークラス」を受講、ディプロマを取得。

2011年、シュトゥットガルトにて「シルヴィア・ゲスティ教授によるマスタークラス」を受講、ディプロマを取得。2011年、ウィーン国際セミナーを受講、ディプロマを取得。

2011年、ディヒラーコンクール(ウィーン)第2位受賞、受賞者コンサートに出演。

大学院オペラ《フィガロの結婚》、スザンナ役でオペラデビュー。

林八重子、日比啓子、澤畑恵美、森晶彦、村田健司、各氏に師事。



### 林 聡子 (はやし・さとこ : ピアノ)

香川県出身。フェリス女学院大学音楽学部演奏学科卒業。

第22回教育連盟ピアノオーディション入賞、入賞者演奏会に出演。

これまでに田中裕子、植松起代子、北川暁子、橘高昌男の各氏に師事。



### 三井 清夏 (みつい・さやか : ソプラノ)

国立音楽大学演奏学科声楽専修卒業、及びオペラ・ソリストコース修了。同大学大学院音楽研究科声楽専攻オペラコース修了。

大倉由紀枝、古市善子の各氏に師事。

長野県新人演奏会、国立音楽大学大学院新人演奏会に出演。同大学主催大学院オペラ「ドン・ジョヴァンニ」ツェルリーナ、翌年「コジ・ファン・トゥッテ」デスピーナにて出演。

第 87・88 回二期会オペラ研修所コンサートに出演。二期会オペラ研修所第 5 5 期マスタークラス修了予定。

### 岡本 知也 (おかもと・ともや : 伴奏ピアノ)

国立音楽大学附属音楽高等学校、同大学を卒業。卒業後に渡仏し、パリ地方音楽院にてディプロムを取得し修了。(CRR de Paris - DEMS) 帰国後に国立音楽大学大学院修士課程を修了。

第 19 回かながわ音楽コンクールユースピアノ部門特選。第 14 回ブレस्तピアノコンクール 2009(フランス)審査員満場一致の一等メダル。

第 21 回友愛ドイツ歌曲(リート)コンクール優秀共演者賞。

カワイ表参道パウゼやパリ郊外各地にてリサイタル、オーケストラとの協演、伴奏、室内楽の分野でも演奏活動を行い、くにたち市民芸術小ホールではサロンコンサートシリーズを展開している。



### 小林 啓倫(こばやし・ひろみち : バリトン)

国立音楽大学声楽専修卒業。同大学院修士課程声楽専攻オペラコース修了。東京文化会館大ホールにて、第 79 回読売新人演奏会に出演。

オペラでは、《ドン・ジョバンニ》タイトルロール、《フィガロの結婚》フィガロ、《コジ・ファン・トゥッテ》アルフォンソ、《愛の妙薬》ドゥルカマーラ、《ボエーム》コッリーネを演じる。また、

J. S. Bach 《マタイ受難曲》、L. v. Beethoven 《合唱幻想曲》などの宗教曲のソリストも務める。声楽を黒田博、小川哲生、佐藤峰子の各氏に師事。

### 三品 萌莉絵 (みしな・もりえ : 伴奏ピアノ)

国立音楽大学附属高、大学卒業。卒業演奏会、室内楽コンサートに出演。特別公開レッスンなどを受ける。ピアノを三木香代、草野明子に師事。今年 3 月に附属高等学校にて卒業生によるミニコンサートに伴奏で出演。現在大学院伴奏科(声楽系)2 年在学中。



## 【曲目解説】

中島 洋一

ドビュッシー 『バンヴィルの7つの詩』から “夢想”、“雅な宴”  
C. Debussy 「Sept Poèmes de Banville」～ ”Rêverie”, “Fête galante”

クロード・ドビュッシー(1862-1918)は10代から20代はじめの最初期においてバンヴィルの詩に傾倒し、11曲の歌曲作品を残している。『バンヴィルの7つの詩』は1880~1882年の作品で、まだマスネー、グノーの影響が窺えるものの、和声法などにおいて、この作曲家の卓越した才能の芽生えを感じさせる。

“夢想” 4/4拍子 この曲集の最初の曲で、“そよ風の優しい息は、野のバラを咲かせます。”とはじまる詩は、軽やかな伴奏に導かれて歌い始める。旋律は微妙に転調しながら、“私は知っている”と歌われるところで、最初のモチーフが拡大して現れ、最後に盛り上がり“幸せを導き死を”歌い、曲を終える。

“雅な宴” 3/4拍子 曲集の第7曲にあたるが、この曲では、管弦楽編曲版で良く知られた、ピアノ連弾曲『小組曲』の第3曲『メヌエット』の旋律が使われているが、作曲年代からして、こちらが先である。古風でやや異国的な雰囲気醸し出すメロディーが、ゆったりしたメヌエットのリズムで歌われる。

ドリーブ “カディスの娘たち”  
L. Delibes “Les filles de Cadix”

レオ・ドリーブ(1836~1893)はバレエ『コッペリア』の作曲家として良く知られているが、歌曲作品はそう多くはない。“カディスの娘たち”は1863年出版『3つのメロディー』の第3曲として書かれている。軽快なポレロのリズムで書かれ、濃厚にスペイン色を感じ曲だが、出だしの旋律はビゼー『カルメン』の「ジプシーの歌」を思い起こさせえる。コロラトゥーラの技術を伴った華やかな曲である。

.....  
ショパン 2つのノクターン 作品 27-1, 2  
F. Chopin 2 Nocturnes Op.27-1,2

「ピアノ詩人」と呼ばれているフレデリック・フランソワ・ショパン(1810-1849)は、20曲のノクターンを残している。この2曲のノクターンは1835年に作曲され、オーストリア駐仏公使夫人であったダッポニ伯爵夫人に献呈されている。嬰ハ短調と変ニ長調という異名同音関係で同じ主音を持った調で書かれているが、曲想は対照的である。

### 1. ノクターン 作品 27-1 嬰ハ短調 4/4拍子

A-B-A'の三部形式、ラルゲット。左手の分散和音導入で始まるが、意図的に第3音が省かれており、曲頭では短調、長調の区別がつかない。右手にもの憂い旋律が現れ、やがて二重唱になって歌い続ける。Bの部分で3/4ピューモッソになり、テンポが速くなる。

そして懐かしむように長調になりマズルカが現れるが、4/4 拍子でA' が再現し、同主長調で曲を閉じる。

## 2. ノクターン 作品 27-2 変二長調 6/8 拍子

この曲は先の嬰ハ短調のもの憂い音楽とは対照的で、明るく優美であり、演奏される機会が多い。形式はショパンのノクターンには珍しくAとBの楽想が交互に現れるロンド風の形式となっている。中間部分では二度目のBがイ長調で現れる。変二長調に戻り、三度目のAとBが奏され、バスの変二音が持続し、上の声部が半音下降するコーダが現れ、華やかに曲を終える。

バーンスタイン 『キャンディード』より “きらびやかに着飾って”  
L. Bernstein [Candide] ~ “Glitter and be gay”

20世紀の代表的な指揮者で作曲家でもあった才人レナード・バーンスタイン(1918-1990)は、多忙でありながらなかなかの多作家で、ミュージカル作品も有名な『ウエスト・サイド物語』をはじめとして5曲残している。『キャンディード』は、ヴォルティールのコントをもとにしており、純情なウェストファリアの青年キャンディードがクネゴンデを探して、世界各地を巡る苦難の旅を続けるオペレッタ風の作品で、82年には歌劇場版も作られている。

“きらびやかに着飾って”は、権力者の二号となったクネゴンデが自分の運命を嘆くハ短調 3/4 の“嘆き節”で始まるが、嘆いていてもしょうがないと、4/4 拍子ハ長調で、急に陽気になり、コロラトゥーラの歌唱法も混じえた軽快なメロディーを歌い出す。セリフの部分もあり、オペラ歌手の歌唱力と、ミュージカル歌手の演技力の両方を必要とする。しかし、さすがに才人バーンスタインの手になるだけに、上記の能力を備えた歌手が歌えば、聴いていて飽きることがない作品に仕上がっている。

アルベニス 『イベリア』より セヴィーリヤの聖体祭  
I. Albéniz [IBERIA] ~ El Corpus-Christi en Sevilla

イサーク・アルベニス (1860-1909) は、スペインの作曲家・ピアニストで、ピアノ作品を中心に、かなりの作品を残している。

『イベリア』は1905~1908年に作曲された作曲者最晩年の作品で、全4巻12曲で構成され、それぞれの巻は3曲からなる。

「セヴィーリヤの聖体祭」は第1巻の第3曲にあたる。嬰ハ短調 2/4 セヴィーリヤの春祭りで宗教的な行列がやって来て、通りすぎてしまうまでを音楽で描いた作品。左手の大太鼓に乗って、タランテラの旋律が行進曲風に奏される。行列が通って行くと嬰ハ長調となり、サエータ(敬虔な宗教歌)が歌われる。またタランテラが現れ、急速な舞曲のリズムに変わる。最後は遠去って行く行列を名残惜しむようにサエータが歌われ、静けさの中で曲を閉じる。

チマーラ 「愛の神よ、ようこそ」 P. Cimara “Ben venga amore”

ピエトロ・チマーラ (1887-1967) は、イタリアの指揮者、作曲家、ピアニストである。イタリアやアメリカでオペラの指揮者として活躍したが、歌曲を中心に、かなりの作品を残している。彼の歌曲は、20世紀の新傾向の影響を受けず、をイタリアのベルカントの伝統を受け継いだ美しく甘い旋律を持ち、イタリアオペラのアリアを想起させる。

「愛の神よ、ようこそ」は、彼の歌曲の中でも、演奏機会の多い作品で、「どうか愛の神よ来て下さい、花咲く楽園を通過して」と、情熱的に愛を願い求める気持ちが、甘美なメロディーで歌われる。

ベッリーニ 歌劇『清教徒』より “あなたの優しい声”  
V. Bellini [I Puritani]~ "Qui la voce sua soave”

ヴィンチェンツォ・ベッリーニ (1801-1835) は、ロッシーニ、ドニゼッティと共に19世紀前半のイタリアオペラ界を代表する作曲家で、34才の若さで没しているが10作のオペラ作品を残している。彼の作品の中でも『夢遊病の女』、『ノルマ』、『清教徒』の3作は特に評価が高く、現在でもしばしば上演される。『清教徒』は彼の最後の作品で、清教徒革命の指導者クロムウェルを率いる清教徒とステュアート王朝の確執があり、クロムウェルがネーズビーの戦いで勝利し、共和政府を樹立した1645年頃を舞台とした、清教徒の娘エルヴィーラと王家に仕える騎士アルトゥーロとの恋を描いたメロドラマである。

“あなたの優しい声”は、アルトゥーロに捨てられたと思込み気が狂ったエルヴィーラが恋人を想って歌う、変ホ長調 4/4 拍子で書かれた美しい旋律をともなった叙情的なアリアである。途中で変ロ長調 6/8 になった部分は、狂った彼女が叔父に声を掛けられても誰か判らず、恋人と思い「私を結婚式に連れて行って下るのね」と喜ぶところである。このアリアは恋に狂った女のいじらしさと可愛らしさがよく表現されたアリアであり、この後変イ長調で歌われる対のアリアと併せ「狂乱の場の歌」として『ノルマ』のアリアと双璧をなすものである。

イザイ 無伴奏バイオリンソナタ第3番 (バラード)  
E.-A. Ysaÿe Solo sonata for Violin no.3 <Ballade>

ウジェーヌ＝オーギュスト・イザイ (1858-1931) は、ベルギーのヴァイオリン奏者、作曲家、指揮者である。高度な技術を持った卓越したヴァイオリニストとして、聴衆を魅了し、ヴァイオリン音楽に大きな影響を与えた。作曲家としてはヴァイオリン曲を残しており、またヴァイオリン協奏曲のカデンツァも数多く書いている。彼はイザイ弦楽四重奏団の創始者でもあった。

6曲ある無伴奏バイオリンソナタは、バッハの無伴奏ヴァイオリンのためのソナタとパルティータを強く意識した作品で、それぞれが別のヴァイオリニストに捧げられている。

無伴奏バイオリンソナタ第3番 (バラード) 二短調 4/4

全6曲の無伴奏バイオリンソナタのうち、この第3番と第6番は一楽章形式になっており、この第3番は高名なヴァイオリニストで作曲家だったジョルジェ・エネスク（1881-1955）に捧げられている。

曲は4/4 ゆっくりと全音階的に上昇する音型で始まり、二短調のドミナントで半終止すると、曲中もっとも重要な半音階的にうねる付点を伴ったBのモチーフが現れる。このモチーフは変形されて何度も出現する。再びドミナントで半終止した後、六連符による32分音符の音型が続く、イ短調でBのモチーフが出現したあと、原調でも出現し半終止すると、急速なコーダに入り、DとAの開放弦の重音の上で、BのモチーフがE線の重音で力強く奏され、情熱的に曲を閉じる。

トーマス 「ストリート ソング」 M.T.Thomas [Street Song]

マイケル・ティルソン・トーマス（1944- ）は、アメリカの指揮者、ピアニスト、作曲家。バースタインなどとも親しく、1995年サンフランシスコ交響楽団の音楽監督に就任するなど、主として指揮者として活動しているが、作曲活動もしており、幾つかの器楽曲が出版されている。

#### 「ストリート ソング」（金管五重奏）

1988年の作で、彼の父に捧げられている。比較的ゆっくりしたテンポで下降音階のモチーフユニゾンで奏され曲が始まる。なおこのモチーフは曲中頻繁に形を変えて出現する。しばらくして、速く活気のある楽想に移る。再び最初のモチーフが現れた後、「くつろいで」と書かれた次の部分に入り、ホルンで16分音符のヨーデル風の旋律が奏される。続いて3拍子でトランペットの歌が続く。へ音の持続音が弱まると、トロンボーンによるグリッサンドでへ音から嬰へ音に移り嬰へ長調となる。そして、スウィングのリズムに乗ってダンス風の音楽が奏でられる。しばらくして最初のテンポに戻ると下降音階のモチーフと、トランペットの歌が重なって奏され音楽的に盛り上がった後、弱奏になり、先のヨーデル風の旋律が弱音器を付けたトランペットで奏され、静かに曲を閉じる。

グノー 歌劇『ファウスト』より トゥーレの王～宝石の歌  
C.F. Gounod [Faust] ~ “Il était un roi de Thulé ~ Air des bijoux”

シャルル・フランソワ・グノー（1818-1893）は、多くのオペラを作曲しているが、ドイツの文豪ゲーテの劇詩『ファウスト』の第一部をもとに作られた同名の歌劇『ファウスト』は、今日でも世界中でさかんに上演されている。

ゲーテの劇詩『ファウスト』は、ロマン派の作曲家達の創作意欲を刺激し、多くの作曲家がそれを題材に音楽作品を手がけている。その中でもグノーの『ファウスト』は、最も成功した作品といえよう。しかし、ゲーテの『ファウスト』は、第一部、二部を通して、はじめてその思想的深みに触れることが出来る作品と考えるが、第二部は舞台化が難しいこともあってか、殆どの作曲家が第一部のみを題材とし、それぞれ自分流に解釈し音楽作品化している。グノーの作品もそうであり、原作のもつ深い思想性は感じられないが、恋を描いた美しい作品に仕上がっている。

トゥーレの王～宝石の歌 は第3幕 (Schirmer 版では第2幕) で歌われるマルガリート  
の二つのアリア。

マルガリートは祭りの時、話しかけてきた、見知らぬ凛々しい若者 (実は悪魔メフィスト  
トフェレスに魂を売り若返ったファウスト) の事が忘れられない。紡ぎ車を廻しながら、  
ファウストを想い「昔トゥイレに王様がいらっしゃり、死ぬまで操正しく王妃の形見の金  
の杯を守っていた」と歌うのが“トゥーレの王の歌” (イ短調 6/8) で、同じ節が二回繰  
り返される。歌い終えた後、マルガリートは戸口に置いてあった宝石箱 (実はメフィスト  
トフェレスが置いたもの) を見つけ、有頂天で宝石を身につけ、「ああ、もしあの方がこん  
な私の姿を見てくださっていたら」と歌う。これが、“宝石の歌”である。ホ長調 3/4 の  
ワルツのリズムで書かれ、彼女の浮き浮きした気分を巧みに表現している。このアリアは  
この作品中でも特に有名なものである。

ラフマニノフ                      コレッリの主題による変奏曲 作品 42  
S.Rachmaninoff                  Variations on a Theme of Corelli op.42

セルゲイ・ラフマニノフ (1873-1943) は、革命で誕生したソビエト政権を嫌い、1917  
年末にはフランスに亡命し、1919年にアメリカに渡り、そこで生涯を終えている。この作  
品は、ピアニスト、作曲家として多忙な日々を送った彼の、最後のピアノ作品であり 1931  
年に作曲されている。イタリアの作曲家コレリ (1653-1713) のヴァイオリン・ソナタ『ラ・  
フォリア』の主題を用い、主題とそれに基づく 20 の変奏曲と間奏曲、そしてコーダによっ  
て構成されている。

彼がこのテーマを選んだ理由を、原曲のきわめてシンプルな旋律、二短調と、二短調と  
へ長調の間を短く行き来する和声構造が、彼の好みにぴったりだったからではないかと想  
像している。短調は彼の好む世界であり、シンプルなテーマほど、自由で複雑な音楽的加  
工を施すのに、向いているからである。

変奏のはじめの部分では、原曲の和声構造、拍子がほぼ維持されているが、変奏が進むに  
つれて、自由になり、ピアノ技巧の上でも難易度が増して行く。長大な規模をもつ作品で  
あるが、一つ一つのヴァリエーションは短くまとまり、しかも、それぞれ変化に富んでい  
るので、優れた演奏のもとでは、聴衆を飽きさせるといことがない。彼の作曲家として  
の力量のみならず、ピアニストとしての力量を彷彿させる名作である。なお、今回は時間  
の都合で一部をカットして演奏する。

ヴェルディ                      歌劇『椿姫』より                  “ああ、そはかの人か～花から花へ～”  
G.Verdi                          「La Traviata」～                  “Ah! fors'è lui ~ Sempre libera～”

イタリアオペラの巨匠ジュゼッペ・ヴェルディ (1813-1901) が小デュマの原作をもとに  
1853年に作曲した『椿姫』は、ヴェルディの代表作の一つであり、数あるイタリアオペラ  
の中で、今日でも非常に上演回数の多い作品であることはいうまでもない。

“LA TRAVIATA”は“道に迷える女”の意味であり、道を踏み外してドミ・モンド (高級娼  
婦) となったヴィオレッタが、かなわぬ真実の愛を求め、悩み苦しむ様を描いた愛のドラ

マであるが、数々の美しい旋律で彩られたこのオペラの奥底には、人間の真実を凝視し、それを表現しようとしてやまない劇音楽作家ヴェルディの鋭い眼と熱い思いがある。台本は『リゴレット』と同じく、脚本家フランチェスコ・M・ヴィアーヴェに依頼している。

このソプラノのアリアは、あまたあるイタリアオペラのアリアの中でも、最もよく知られているものの一つであろう。一途で純情な青年アルフレッドに愛を告白された椿姫ヴィオレッタが、強い胸のときめきを感じて歌うのが「**ああ、そはかの人か（へ短調 6/8）**」であり、自分の現実を振り返り、花から花へ移り廻って快樂の日々を送る自分に、いまさら気質の生活などに戻ることが出来るわけではない。あのような純情の青年の愛を受ける資格など私にはない、と自暴自棄になって歌うのが「**花から花へ（変イ長調 6/8）**」である。彼女が歌っていると、アルフレッドが歌う愛のモチーフが聴こえてくる。喜びと絶望の間で激しく揺れるヴィオレッタの心。なお、オペラの実公演のみならず、演奏会形式で歌う場合でも、アルフレッドの歌声が入るが、本日はコンサートの性格もあり、アルフレッドの歌声は入らない。

.....  
レーヴェ “オルフ氏” C. Loewe “Herr Oluf”

カール・レーヴェ（1796 - 1869）は、ドイツ初期ロマン派の作曲家で、歌手である。バラードと呼ばれる比較的長い物語詩への作曲を得意としており、500曲に至るバラードを含む歌曲の他、多くの作品を残しているが、現在では歌曲のみが演奏される。また創作時期は、シューベルト、シューマンと重なっている。

“**オルフ氏(ホ短調 4/4)**も物語性を持った詩に作曲されている。オルフ氏は明日にひかえた自分の婚礼に客を招くために、夜遅く馬で出かける。森で魔王の娘に会い、一緒に踊るようにせがまれる。オルフ氏がそれを拒むと、魔王の娘は彼を打つ。彼は激しい苦しみを感じ家に帰る。許婚が彼の家を訪ねた時には、彼はすでに息絶えていた。曲は速いテンポで始まるが、魔王の娘に打たれ、青ざめて家に帰るところはテンポが遅くなり、呟くような歌声になる。音楽は詩の物語の展開と密接な関連性を持って作られている。

ビゼー 歌劇『カルメン』より 闘牛士の歌  
G. Bizet [Carmen] ~ Votre toast, “je peux vous le rendre”

ジョルジュ・ビゼー（1838 - 1875）が作曲した『カルメン』は、今では最も人気のあるオペラ作品となっている。この作品は名曲が連なっており、観ても聴いても退屈するということがない。第2幕でドン・ホセの恋敵の闘牛士エスカミリオが歌う『**闘牛士の歌（4/4へ短調→へ長調）**』は、このオペラの中でも、もっとも人々に愛されているアリアである。

特にへ長調になって「トレアドール構えて」と歌われる旋律は、テレビのコマーシャルやお笑い番組などでも引用されるほど良く知られている。なお、オペラのエスカミリオは格好いい恋敵として描かれているが、メリメの原作では、闘牛で怪我を負い不具となった冴えない男として描かれている。

日本音楽舞踊会議 作曲部会公演  
**作曲部会作品展**

～ 日本音楽舞踊会議 創立50周年記念 ～

2012年5月10日(木) 18:30 開演

すみだトリフォニー 小ホール

主催：日本音楽舞踊会議 作曲部会／後援：月刊『音楽の世界』

《ごあいさつ》

本日は多用中の折から日本音楽舞踊会議作曲部会作品展にお運び頂き心より感謝申し上げます。

五十年の歴史を持つ本会が、数多くの作品の誕生の場となり今日に至りました。あるは人々に膾炙し、あるは埋もれますが、今日発表されます作品が一人でも多くの人々に共感をもって迎えます事を心より念じつつ、最後までお楽しみ頂ければ出品者にとりまして望外の喜びと成ります。

最後にコンサートを支えて下さった演奏家の皆様、スタッフの皆様、作曲者一同、こころより御礼を申し上げ、ご挨拶とさせていただきます。

出品者一同

《プログラム》

1 大和実 Minoru YAMATO

大和ミエ子詩謡集「さくら さくら」より (詩大和ミエ子)

1. こぶしの花 2. 「冬の鳥」 3. 「榛名賛歌」

M. Sop. 湯川亜也子 Pf. 森田真帆

2 高橋 通 Toru TAKAHASHI

ピアノ ソナタ (初演) Sonata for Piano

Pf. 鈴木菜穂子

3 津田裕子 Hiroko TSUDA

「ヘスペリデスの庭」(初演) Garden Of Hesperides

F1. 1 吉崎恭佳 F1. 2 池田若菜 Pf. 宮入柚子

4 桑原洋明 Hiroaki KUWAHARA

ピアノ三重奏『ある内なる対話』(初演) Piano Trio [The inner dialogue]

Vn. 坂本瑠美 Vc. 伊藤顕輔 Pf. すずきみゆき

5 金藤 豊 Yutaka KANETO

ヴァイオリン ソナタ 第5番 (改訂初演) SONATA for Violin and Piano

Vn. 北川靖子 Pf. 高橋健介

6 島筒英夫 Hideo SHIMAZUTSU

「防人の歌」(作詩: 高橋一仁) (初演)

第一首 おそろしや 第二首 ふるさとよ

第三首 いきのしま 第四首 ねんきおえ

第五首 としおいた 第六首 いつのよか

Sop. 浦 富美 Pf. 島筒英夫

7 穴原雅巳 Masami ANAHARA

弦楽四重奏のためのレクイエム (初演) Requiem for String Quartet

Vn. 1 西田和子 Vn. 2 湯山怜史 Va. 宮本美喜 Vc. 安東和美

8 ロクリアン正岡 Locrian MASAOKA

「ライオンへの畏敬」—バリトンサクソフォンによる(初演)

Baritone saxophone solo: "Homage to a Lion"

Baritone Sax, solo 小串俊寿

サクソフォン八重奏曲「来音=ライオン」(初演) Saxophone octet: "A Lion"

東京音楽大学サクソフォン・アンサンブル 指揮 小串俊寿

## 《曲目解説・出品者／演奏者プロフィール》

### ① 大和 実 大和ミエ子詩謡集「さくら さくら」より

1、「こぶしの花」 2、「冬の鳥」 3、「榛名賛歌」

昨年夏、大和實先生の突然の訃報を受け、今でも信じられない思いです。一昨年に大和先生の歌曲を演奏させて頂く機会に恵まれ、演奏会当日に至るまで、先生のお忙しい中を何度も温かくご指導頂いた日々が昨日の事に思い出され、またいつかきっと先生にお会いできるのではないかという想いをどうしても拭えずにあります。「誰もが口ずさめて、親しみのある音楽を書きたいと思っています」という先生のお言葉の通り、譜面を頂いたその日から、大和先生の温かくお優しいお人柄がそのまま映し出されているような音楽が大好きになりました。ご指導を頂く中で、細かいニュアンスについても数々のアドバイスを頂くと共に、先生の朗々としたお声を重ねて一緒に歌って下さりながら、溢れる想いを最後まで穏やかに、そして熱くお伝え下さいました。素敵な音楽を残して下さいました大和實先生に心からの感謝の気持ちを込めて、この度も大切に組み立てさせて頂きたいと思ひます。

(文：湯川 亜也子)



#### 【大和 実 プロフィール】

さいたま市生まれ。武蔵野音楽大学声楽科卒業。尚美音楽院作曲専科修了。ピアノを池田 浩、木下文彦、声楽を山田正雄、岩崎常次郎、作曲を福島雄次郎、黒髪芳光、中島洋一の各氏に師事。童謡と歌曲の作曲に取組む。日本音楽舞踊会議元理事、元作曲部会長。昨年7月逝去。



#### 【湯川 亜也子(メゾ・ソプラノ) プロフィール】

国立音楽大学音楽学部声楽学科卒業。同大学大学院音楽研究科声楽専攻(フランス歌曲コース)修了。同大学大学院博士後期課程音楽研究科声楽研究領域修了。博士論文『フォーレ晩年の連作歌曲《エヴァの歌》—新しいエヴァ像の創出—』とそれに関する演奏で博士号(音楽)取得。同大学院研究奨学金受賞。第30回東京都新人演奏会、大学院新人演奏会、フレッシュコンサート2007等に出演。第15回日仏声楽コンクール第1位、第20回奏楽堂日本歌曲コンクール奨励賞受賞。秋山理恵氏に師事。日本音楽舞踊会議青年会員。国立音楽大学バハ音楽研究所研究員。



#### 【森田 真帆(ピアノ) プロフィール】

桐朋学園大学演奏学科ピアノ専攻卒業。卒業演奏会に出演。国立音楽大学大学院修士課程器楽専攻伴奏科修了。アジアクラシックコンクール優秀賞、サトウ・ディヒラー記念コンクール第2位、飯塚新人音楽コンクール第3位入賞。これまでに玉置善己、山崎牧子、近藤伸子の各氏に師事。これまでにフレッシュコンサート、フランス歌曲研究コンサートのなど、日本音楽舞踊会議のコンサートに数多く出演。現在、国立音楽大学大学院歌曲科伴奏員。

### ② 高橋 通 ピアノソナタ

2004年頃に手を付け始め、2008年あたりから少しずつ書き進めてきた作品。古典的なありふれた手法(テーマや音形の操作、リズム等)で作曲した。20世紀前半の、比較的穏

健な作風のピアノ曲を参考にした。作曲を始めた当時、例えば、スクリャービン、プーランク、バーバーなどの作品をよく聴いていたので、少なからぬ影響を受けている。

当初は、多楽章の作品の予定であったが、簡潔に纏めることが重要だと考え、1つの楽章とし、その中に内容を凝縮し尽くすことにした。全体は4つの部分から出来ていて、全体に、力強く、強烈で、派手な様相を求めた。 (高橋 通)



### 【高橋 通 プロフィール】

1947年、神奈川県小田原市に生まれる。現在埼玉県飯能市在住。

神奈川県立平塚江南高等学校を経て、日本医科大学、同大学院入学終了。医師、医学博士。ピアノを故川村薫子師に、作曲を田辺恒弥師に師事した。一絃琴の手ほどきを琴者故山本游魚師に受けた。伝統的な一絃琴音楽の作品から現代音楽まで、広い範囲にわたる作曲作品がある。幽意一絃琴「鳴琴会」主宰。(社)日本歌曲振興会会員(作曲)。日本音楽舞踊会議(CMDJ)会員(作曲部会)。

主な作曲作品：箏独奏ソナタ11番、バイオリンと箏のためのソナタ第2番、オペラ「伝説精進ガ池幻想」、箏の弾き語り「花と月と 春秋」、歌曲「ホテルの窓に降る雪は(中島登・詩)」等。



### 【鈴木 菜穂子(ピアノ)プロフィール】

3歳よりピアノを始める。YAMAHA 音楽教室にてピアノ、エレクトーン、作曲を学ぶ。在籍中 JOC ドイツ・スイス公演にて自作のピアノコンチェルトを地元のオーケストラと演奏。他、多数のコンサートに出演。子供のための音楽教室を経て、桐朋女子高等学校音楽科、同大学、同研究科修了。在籍中 Dang Thai Son、Vladimir Tropp 氏 他、多数の公開レッスンを受講。またピアノソロ、管弦楽器とのデュオ、室内楽等で多数のコンサートに出演。2004年在学中に親友(Vn.)と共に、ローザンヌ夏期講習に参加。PierreAmoyal(Vn.), Bruno

Canino(Pf.)両氏に師事。これまでに、斎木ユリ、徳丸聡子の各氏に師事。現在は伴奏、介護施設や教会等での演奏、現代曲の初演などフリーで活躍中。現代日本の作品については、桑原洋明：ピアノ・ソナタ「伊勢の海」などを初演している。

## ③ 津田 裕子「ヘスペリデスの庭」

### 1. 「ヘスペリデスの泉」

人は死んでこの世を離れると、西のヘスペリデスへ行く。そこには樹々に囲まれ、鳥がさえずる透明な泉があり、その水を飲むと現世の記憶を失うという。生命が発する水であり、命が還るところ。いつか私達もまたこの泉のほとりで出会うだろう。

### 2. 「ヘスペリデスの園」

楽園の「黄金のりんごの木」を守る3人のヘスペリスたちは、歌いながら舞い踊る。黄金のりんごを奪うために竜を倒したヘラクレス(またはペルセウス)は、人間に不死への憧れを抱かせることになるだろう。落日の陽に染まるヘスペリスの乙女たちが竜を哀悼し、人間へ「呼び声」を送るのが聞こえるだろうか。2人のフルートは、人間が常に1人ではないことを示唆している。不可視の世界から、耳元で囁きかけるヘスペリスの声が聞こえますか。(津田 裕子)



### 【津田 裕子 プロフィール】

桐朋学園大学音楽学部演奏学科ピアノ専攻卒業。5才より桐朋学園附属音楽教室で学ぶ。オーストリアのバートアウスゼー夏期セミナーで、元ウィーンアカデミーのファン・デン・フック氏に師事。ブラチスラヴァの歌劇場オケと協奏曲を演奏。新日フィルのトップメンバーの伴奏等、多数の演奏会に出演。声楽家きむらみかの伴奏でCD録音。1995年、文化庁の日本文化発信事業・インド公演で自作が上演される。2010年、サイトウキネンのNYカーネギーホール公演に出演。現在、サイトウキネン・フェスティバルのメインプログラム「火刑台上ジャンヌ・ダルク」(オネゲル)の伴奏をつとめる。松本ピアノ協会副代表。



### 【吉崎恭佳（フルート1）プロフィール】

弥栄東高校音楽科コース卒業。これまでに、フルートを中山あかね、飯島和久、白尾彰の各氏に師事。第60回全日本学生音楽コンクール高校の部、本選入選。現在、桐朋学園大学古楽器専攻科に在籍し、モダンフルート、フラウト・トラヴェルソを有田正広特任教授の許で研鑽中。オリジナル楽器オーケストラ、クラシカルプレイヤーズ東京のライブラリアンを務める。



### 【池田 若菜（フルート2）プロフィール】

高校よりフルートを永井由比氏に師事。全日本学生音楽コンクール入選。桐朋学園大学に入学し、モダンフルートを野口龍、白尾彰の両氏に、フラウト・トラヴェルソを有田正広氏に師事する。室内楽では法倉雅紀氏に師事し現代音楽を中心に学ぶ。古典から現代音楽まで幅広い室内楽作品に触れ演奏活動に取り組む。現在大学4年在学。



### 【宮入 柚子（ピアノ）プロフィール】

長野県出身。今春桐朋女子高等学校を卒業しカレッジディプロマコースに在籍中。2008年桐朋学園子供のための音楽教室中学3年生卒業演奏会（紀尾井ホール）、2009～2011年桐朋学園夏の夕べのコンサート（長野ホクト文化ホール）、フレッシュアーティストコンサート（上田市信州国際音楽村）に出演。ピアノを玉置善己、新井博恵、ミハヤイル・クリスト、各氏に師事、室内楽を北本秀樹氏、徳永二男氏に師事。

.....

## ④ 桑原 洋明 ピアノ三重奏 『ある内なる対話』

江戸川区少年少女オーケストラのトレーナーとして集まる三人が丁度ピアノトリオになるので、この曲を書いた次第です。色々トリオを聞くうち、ラベルのそれに圧倒的なインパクトを感受～午睡にまどろむ妖艶なニンフのような一楽章、その神業のように奔走する音の流れ相互の相克と相生と巧妙で錯綜する楽器の扱いに弾け飛ぶ稠密で複雑なリズムのPantoum(二楽章)、静謐に満ち清楚で簡素なPassacalle(三楽章)、そして豊満なソノリティー(響き)のFinal～そのどれとても無い私の作品、ある事と言えば、残照の諦念とは余りに寂しすぎないか。

本日の初演にご尽力頂いた坂本瑠美、伊藤顕輔、すずきみゆきの諸氏に心より感謝申し上げます。(桑原 洋明)



### 【桑原 洋明 プロフィール】

国立音楽大学作曲学科卒。菊川迪夫、外崎幹二、島岡譲、高田三郎に師事。  
主要作品 管弦楽「津軽風土記」「四つの塑像」「フルートと弦楽のための四つの民謡」、吹奏楽「三つの断章」「ドリアン・ラブソディー」、室内楽「ピアノ奏鳴曲 伊勢之海」「三重奏 (Vn. Cl. Pf.) 二つ積んでは母のため」「クラリネットとピアノによる蛇性奇譚」「クラリネットとピアノのための三つの民謡」「フルートとピアノによる詩曲 敦盛幻影」「女声合唱曲 新古今和歌集による四季の歌」他。



### 【坂本 瑠美 (ヴァイオリン) プロフィール】

東邦音楽大学付属東邦中学校、高等学校を経て、同大学を卒業。  
在学中、定期研究発表演奏会、卒業演奏会等に代表出演。  
これまでにヴァイオリンを天満敦子、宮野陽子、宮崎孝江、室内楽を大久保淑人の各氏に師事。第12回全日本ソリストコンテスト奨励賞受賞。音楽教室で後進の指導に当たりながら、オーケストラ、室内楽、ソロ、録音等で演奏活動の幅を広げている。現在、東邦音楽大学オーケストラ研究員、東邦音楽学校講師、江戸川区少年少女オーケストラトレーナー。



### 【伊藤 顕輔 (いとう けんすけ:チェロ) プロフィール】

15歳よりチェロを始める。東京音楽大学に特待生奨学金を得て入学し、卒業後、同大学大学院科目等履修を修了。ソロ、オーケストラでの演奏の他、弦楽四重奏、ピアノ三重奏を中心とした室内楽奏者として幅広く演奏活動を行う。  
第9回日本アンサンブルコンクール優秀演奏者賞、第11回大阪国際コンクールアンサンブル部門最高位(1位なしの2位)受賞。  
チェロをドミトリー・フェイギン氏に、室内楽を東彩子氏に師事。



### 【すずき みゆき (ピアノ) プロフィール】

1955年、岩手県宮古市に生まれる。3才よりピアノ・創作を始め、可憐な生物の住む自然界の弱肉強食のダイナミズムに心を動かされ表現活動を続けている。  
東京芸術大学音楽学部作曲科卒業。在学中、モスクワに渡り、ゲーシン音楽学校においてレオニード・オグリynchuk氏にピアノを師事する。  
現在は、後進の指導に当たりながらライフワークの管弦楽を中心とした作曲や編曲、また、新曲初演のピアノ演奏を行っている。

## ⑤ 金藤 豊 ヴァイオリン ソナタ 第5番

第一楽章 主題とそれに続く旋律、その発展による。

第二楽章 Elegie 生涯無二の友を失いしことへの哀歌

(本家と分家の)一級上の本家の息子 光明とは小さい頃から兄弟の様に過ごした。第二次大戦末期、彼は半強制的に、満蒙開拓義勇軍に入隊させられ、病気一つしたことの無かった体をこわして、21歳の若さで亡くなった。若者に限らず人の生命の、軽んじられ消耗された時代、――への怨嗟のうたでもある。

第三楽章 バッハへのオマージュ。(金藤 豊)



### 【金藤 豊 プロフィール】

1931年尾道生まれ。伊藤昇、清瀬保二両氏に師事。  
主要作品 ヴァオリンソナタ第2番（西行ソナタ）、ヴァイオリンソナタ第5番、尺八とピアノによる被爆者の葬煙、The Cremation of the Atom Bomb Victims, 二上山（ふたかみやま）大伯皇女（おおくのひめみこ）大津皇子（おおつのみこ）のうたによる、等。



### 【北川 靖子（きたが わきよこ：ヴァイオリン）プロフィール】

W. シュタフォンハーゲン教授に師事。東京藝術大学卒業。71年オーストリア国立ウィーン音楽大学入学、ヴァイオリンをF. サモヒール教授に、室内楽をF. ホレチェック教授に師事。75年ウィーン音楽大学を全教授一致の最優秀で卒業。ザルツブルク・ミラベル宮殿、東京でリサイタル。

76年ハンブルク交響楽団に入団。コンサートミストレスに就任し81年にハンブルク市文化局主催コンサートでリサイタル。87年東京にてリサイタル。89年北川暁子、千本博愛と「セルヴェ・トリオ」を結成し以後毎年演奏会を開催。北川暁子とは85年12月から91年12月にかけて25回の「デュオの夕べ」を開催、92年以降は「ソナタの夕べ」を毎年開催している。

現在、瀬戸フィルハーモニー交響楽団（高松）コンサートミストレス。日本音楽舞踊会議理事



### 【高橋 健介（ピアノ）プロフィール】

埼玉県立大宮光陵高校音楽科ピアノ専攻卒業。現在、東京芸術大学楽理科3年在学中。

第16回埼玉ピアノコンクール中学生部門銅賞。第31回ピティナ・ピアノコンペティションE級全国大会入選。ピアノを森山あす香、平田博通、北川暁子の各氏、音楽学を野本由紀夫、和声学を遠藤雅夫に師事。2011年日本音楽舞踊会議主催フレッシュコンサートCMDJ2011に出演。

## ⑥ 島筒 英夫 「防人の歌」（作詩：高橋一仁）

高橋一仁先生より「防人の歌」という課題が与えられました。「防人」といえば、昔歴史の授業の時に聞きかじっただけで、普段は考えたこともありませんでしたので、いささか戸惑いました・・・。

さて、何度も繰り返しこの詩を読み味わい、こんな風を読みといてみました。そして本日発表するような曲になったのです。私には今までになかった曲調かと思います。

第一首「おそろしや」指令を受けての驚きと衝撃

第二首「ふるさとよ」赴任先への悲しい旅路

第三首「いきのしま」波の音が聞こえるこの島でのきびしい勤めと、残してきた妻への募る想い

第四首「ねんきおえ」勤めを終えての疲れきったむなしい帰途

第五首「としおいた」その後の淡々とした平凡な人生

第六首「いつのよか」後の世までにわたる永遠の祈り

これらの表現を浦さんの歌に託します。私にとっては新しい世界に目を向けさせていただいた高橋先生に感謝致します。（島筒 英夫）



**【島筒 英夫（しまづつ ひでお）プロフィール】**

1952年東京生まれ。2歳の時病気で失明。6歳よりピアノを始める。1971年武蔵野音楽大学ピアノ科に当時全盲として初めて入学。1975年卒業。その後ピアノソ ロ曲・歌曲・ピアノによる物語イメージ曲等の作曲を始める。最近各地の保育園、幼稚園で卒園時に歌われている「さよなら ぼくたちのほいくえん（ようちえん）」の作曲家。日本音楽舞踊会議賛助会員。



**【浦 富美（うら ふみ：ソプラノ）プロフィール】**

武蔵野音楽大学声楽科卒業。上浪明子・二代目松原操（大滝てる子改め）各氏に師事。1996年全盲の作曲家島筒英夫氏の曲に出会い、その作品の温かさ・素晴らしさに深く感動し、以来、氏の作品を歌い続けている。島筒氏の曲を含む美しい日本歌曲を中心としたコンサート活動を行っている。日本音楽舞踊会議会員。



**【詩人プロフィール：高橋 一仁（たかはし いちひと）】**

1930年横浜生まれ。1954年（昭和29年）NHK芸術祭参加作品「水車小屋」が第一席入選。歌：藤山一郎・安西愛子。日本歌謡芸術協会で「津軽桃唄世去れ節」が「顧問賞」。歌：民謡界星野信子。「富山の姉さま」（歌：川田正子）「別れ雪」（歌：曾根きよ美）が「審査委員特別賞」を受賞。童謡集「なるごのこけし」「春のニシン場」ほか多数。雨情会・日本歌謡芸術協会所属。

**⑦ 穴原 雅己 弦楽四重奏のためのレクイエム**

この曲は、今から15年ほど前、1997年に作曲したもので、今回が初演になります（この際、若干手を加えました）。この「レクイエム」というタイトルは、初めから意図したものではなく、曲が出来上がってから付けたものですが、曲想そのものがそうした方向性を内包しているように思われます。恩師、作曲家黒髪芳光先生が逝去されてこの5月でちょうど10年になります。また、昨年3月の東日本大震災では多くの尊い命が失われております。こうした時節に、謹んでこの曲を演奏させていただき、及ばずながら鎮魂と哀悼の意を表したいと思えます。（穴原 雅己）

**【穴原 雅己（あなはら まさみ）プロフィール】**



群馬県生まれ。作曲を黒髪芳光、中島洋一の各氏に師事。作品には、管弦楽曲・室内楽曲・ピアノ曲・声楽曲などがある。「2003ひびけ野ばらコンサート」作曲募集（松本市）佳作、群馬県童謡作詞作曲家協会主催第10回及び11回童謡作曲コンテスト入賞。当会をはじめ、日本童謡協会主催の公演（童謡祭、こどものコーラス展）などでも作品を発表している。日本童謡協会会員、日本音楽舞踊会議賛助会員。太田市役所（おおた芸術学校）勤務。



**【湯山 怜史 (ゆやま さとし) [第1ヴァイオリン] プロフィール】**

桐朋女子高等学校 (共学)、同大学卒業。辰巳明子、西田和子、森川ちひろ、梅津美葉の各氏に師事。フランス・クールシュベール音楽祭にてA.グラール氏に師事。おおた芸術学校講師。



**【西田 和子 (にしだ かずこ) [第2ヴァイオリン] プロフィール】**

桐朋学園大学音楽学部弦楽科を卒業。故・鷺見三郎氏、辰巳明子氏に師事。ザルツブルグ夏期音楽アカデミーでサンドール・ベーク氏、草津音楽アカデミーで豊田耕児氏、サシコ・ガブリロフ氏、ジェラルド・プレー氏のレッスンを受ける。1975年～1982年、群馬交響楽団に在籍。1983年及び1992年、「ヴァイオリンソナタの夕べ」開催。桐朋学園大学附属「子供のための音楽教室」太田教室講師。おおた芸術学校講師。



**【重光 明愛 (しげみつ あきえ) [ヴィオラ] プロフィール】**

13歳よりヴィオラを始める。洗足学園音楽大学卒業。同大学院修了。大学卒業時、優秀賞を受賞し卒業演奏会に出演。GMMFS音楽祭、秋吉台室内楽セミナーに参加。在フリー奏者として室内楽やオーケストラなどで活躍中。ヴィオラを奥村和雄、岡田伸夫の各氏に師事。室内楽を渡部亨、木越洋、岡田伸夫の各氏に師事。



**【安東 和美 (あんどう かずみ) [チェロ] プロフィール】**

武蔵野音楽大学卒業。チェロをヴァーツラフ・アダミーラ、瀬越憲、花崎薫各氏に師事。室内楽をクレメンス・ドル、西田博、菅原英洋各氏に師事。1999年IMKドイツ国際マイスタークルゼ参加。現在、室内楽、オーケストラ等で演奏するかたわら、後進の指導にあたっている。おおた芸術学校講師。

.....

**⑧ ロクリアン正岡**

**「ライオンへの畏敬」ーバリトンサクソフーンによる  
サクソフーン八重奏曲「来音＝ライオン」**

集まった男性作曲家の脳裡に突き刺さるライオンのような美人女性作曲家の“発言”、「全身の毛が30歳にして抜け、二年後、あたかも永久歯のごとくに新しい毛が生え揃った。」に触発され着手したこの作曲であるが、モデルは美丈夫そのものの雄来音である。聴く者の臓腑を震撼させずにはおかない素晴らしいその重低音。彼らは長いこと、その強さゆえに征服の対象とされ強さの象徴として国旗にまで祀られて来た。だが満足に音楽表象化されたことはないようだ。作曲家にとってこれほどの獲物はない。その美は女性美とは違って、男神が自分の強さを自然の中に見たがる気持ちの輝く様ではなかろうか。生命

＝持続性や、個＝空間内存在意欲、においては彼らに叶わない私だ。だが、意識においては彼らに負ける筈がない。私は人間だし作曲家であるからだ。そして意識の本質は、自由自在性、宇宙遍満性、永遠性＝時空超越性であろう。

彼らとの闘いに私は真鏡（まきょう）を使用した。動物という現実の物をモデルとしても、音楽というものは己が領域に物質を持ちこむことはない。音にせよ映像にせよ、知覚材ははいれても物質ははいれないという点、音楽はまことに鏡と似ている。しかも私は個の意欲や生命の持続を鏡の中に映し込むのを得意としているが、そういう能力こそ、意識というものの人間における特有の現れ方である。

いつか私が作曲を通して自分自身の生命とか個とかを超越しきれた時には、人間以前の意識の基点に神の存在をより強く感じることもあるのかもしれない。

（ロクリアン正岡）



### 【ロクリアン正岡 プロフィール】

サクソフォーン八重奏曲は某作曲コンクールの譜面審査で予選落ちしている。これは私の生き方そのものと現在の文化状況との反りの合わなさの如実な現れだろうか？



### 【小串 俊寿（おぐし としひさ：バリトン・サククス）プロフィール】

1982年東京藝術大学卒業。1984年パリ国立高等音楽院を1等賞で卒業。現在、国内外でソロ・コンサート（小串 俊寿 HAPPY SAX CONCERT）を展開する他、東京音楽大学、昭和音楽大学、尚美学園大学講師として後進の育成にも情熱を注いでいる。現代音楽ソリストグループの東京シンフォニエッタメンバー。

### 【東京音楽大学サクソフォーンアンサンブル プロフィール】



この度の東京音楽大学サクソフォーンアンサンブルメンバーは、河原（大学院2年生）、菊地、外山、田村、伊東、田中、中村、大野（7名は大学4年生）のメンバーで構成されている。

# 会と会員の情報

## お詫び

先月号の、この「会と会員の情報」頁に掲載漏れがございました。

- ①今年度役職報告の内、「出版局 楽譜出版部長 高橋雅光」の記載漏れ
  - ②「3月18日より4月13日の会員活動スケジュール」の記載漏れ
- 以上2件です。此所にお詫びの上、改めて掲載させていただきます。

## CMDJ 会と会員のスケジュール

2012年

**3月**

(これ以前 省略)

- 18日(日) 廣瀬史佳ー ブルクハルト・トエルケ ヴァイオリンコンサート「フリッツ・クライスラー没後50年に思いを寄せて」【山梨県アルコス・アルモニコホール(葉袋邸)15:30開演 大人2,000円 高校生以下1,000円】
- 25日(日) エレクトーン・オケによる「コンチェルトと歌曲の調べ」  
【ヤマハ・エレクトーンシティ渋谷 16:00開演 3,000円】  
『詳細は裏表紙掲載のチラシ参照』
- 26日(月) 廣瀬史佳ーブルクハルト・トエルケ ヴァイオリンリサイタル  
やまなしジュニアオーケストラ定期演奏会でのミニコンサート  
【山梨県コラニー文化ホール 小ホール18:30開演 500円(全席自由)】
- 31日(土) 合唱劇「カネット」作曲：藤村記一郎 指揮：岩本達明  
演出：馬場紀雄 カネット役：鳴海卓 【アミュー立川大ホール 17:30  
2,500円(当日2,999円) 18歳以下 1,500円 障害者1,500円】

**4月**

- 1日(日) 合唱劇「カネット」 作曲：藤村喜一郎 指揮：岩本達明  
演出：馬場紀雄 カネット役：鳴海卓 【アミュー立川大ホール  
13:30】  
2,500円(当日2,999円) 18歳以下1,500円 障害者1,500円
- 7日(土) 定例理事会【日本音楽舞踊会議事務所 19:00~】
- 10日(火) 深沢亮子 朝日カルチャーセンター 共演：Vn. 井上静香さんと  
ベートーヴェン：ピアノとヴァイオリンの為のソナタ No.5  
ブラームス：ヴァイオリンとピアノの為のソナタ No.1  
【朝日カルチャーセンター13:00 問い合わせ：朝日カルチャーセンター  
03-3344-1945】
- 13日(金) CMDJフレッシュコンサート2012  
～より豊かな音楽の未来をめざして～  
『詳細は裏表紙掲載のチラシ参照』  
【すみだトリフォニー小ホール 18:30開演 2,500円】

- 18日(水) CDを聴く会 ～ハンス・ロットを聴く～【会事務所 14:00より】  
 20日(金) 北川暁子ピアノリサイタル ベートーヴェンソナタ全曲連続演奏会 第  
 5夜 第2番 第20番 第15番 第16番 第30番  
 【津田ホール 19:00 一般5,000円、学生3,000円 問い合わせ:サウンド  
 ギャラリー 03-3351-4041】  
 29日(祝日・日) 織畠匡子 音楽ヘルパー講座  
 【13:00-16:00 四谷地域センター 10階 3,000円】

5月

- 7日(月) 定例理事会【日本音楽舞踊会議事務所 19:00～】  
 10日(木) 作曲部会公演 作曲部会作品展  
 【すみだトリフォニー小ホール 18:30 開演 入場料3,000円】  
 『プログラム等は裏表紙掲載チラシをご参照下さい』  
 13日(日) 橘川琢作曲 詩と音楽を歌い、奏でる 第15回「トロッタの会」  
 橘川琢作曲: 組曲「都市の肖像」第三集《The backlight of a time》より  
 【18時開演予定 早稲田奉仕園スコットホール・講堂 3,000円】  
 18日(金) 北川暁子ピアノリサイタル ベートーヴェンソナタ全曲連続演奏会 第  
 6夜 第5番 第9番 第14番 第18番 第26番  
 【津田ホール 19:00 一般5,000円、学生3,000円 問い合わせ:  
 サウンドギャラリー 03-3351-4041】

6月

- 7日(木) 定例理事会【日本音楽舞踊会議事務所 19:00～】  
 9日(土) 芝田貞子・嶋田美佐子・高橋順子「平和のためのコンサート」  
 ゲスト: 小森香子(詩人)・狭間壮(テノール)・はざまゆか(鍵盤ハー  
 モニカ) 講演「青い空は青いままで子どもらにつたえたい」 他  
 【牛込笹筥区民ホール 14:00～ 2200円】  
 12日(火) 深沢亮子 朝日カルチャーセンター 共演: Vn. 中村静香さんと  
 モーツァルト ピアノとヴァイオリンの為のソナタ K.454、ブラームス ヴ  
 ァイオリンと ピアノの為のソナタ No.1 【朝日カルチャーセンター13:00  
 問い合わせ: 朝日カルチャーセンター03-3344-1945】  
 15日(金) 北川暁子ピアノリサイタル ベートーヴェンソナタ全曲連続演奏会 第  
 7夜 第6番 第11番 第12番 第24番 第32番  
 【津田ホール 19:00 一般5,000円、学生3,000円 問い合わせ:サウ  
 ンドギャラリー 03-3351-4041】  
 24日(日) ピアノ部会試演会【10:00～13:00 新井宅(西荻窪)】  
 24日(日) 千葉邦楽合奏団定期演奏会—高橋雅光作曲「独奏尺八のための悲」  
 坂田誠山(尺八) 清水フミヒト(舞踊) 演奏【千葉市民会館 14:00】  
 25日(月) 深沢亮子 翔の会 公開レッスン  
 【トモノホール 10:00 問い合わせ: 大山喬子 044-966-5224】

7 月

- 7日(土)定例理事会【日本音楽舞踊会議事務所 19:00~】  
7日(土)声楽部会コンサート 「歌い継ぐ童謡・愛唱歌コンサート」  
【すみだトリフォニー小ホール14:00 2,500円】  
13日(金)ピアノ部会コンサート  
【東京オペラシティリサイタルホール18:30 3,500円 学生2,500円】  
14日(土)深沢亮子 日生劇場ピロティコンサート共演:永井公美子(Vn) 植木昭雄  
(Vc) シューベルト:ソナチネNo.2、ソナタ「アルペジオーネ」、Pト  
リオNo.1 【14:00 日生劇場 問合せ Fax:F.シューベルトソサエティー  
03-5805-6318】  
29日(日)深沢亮子 栗栖麻衣子さんとの連弾とソロ【熊谷文化創造館さくらめいと  
太陽のホール 15:00 開演予定 問い合わせ:武田 080-3310-4238】

9 月

- 7日(金)定例理事会【日本音楽舞踊会議事務所 19:00~】  
8日(土)深沢亮子ピアノリサイタル 共演:ウィーン弦楽三重奏団  
E. Sebestyén(Vn) H. Pascher (Vla) A. Skocic(Vc) 吉田聖也 (Cb)  
モーツァルト:ケーゲルシュタット・トリオ、ベートーヴェン:ピアノとチェ  
ロのためのソナタ No.4 シューベルト:ます 【14:00 浜離宮朝日ホール  
(お問い合わせ)新演奏家協会 03-3561-5012】  
21日(金)CMDJオペラコンサート2012  
【すみだトリフォニー小ホール 詳細未定】  
23日(日)千葉音楽コンクール本選審査【問い合わせ:千葉音楽コンクール事務局  
043-227-0055】  
29日(土)深沢亮子 東邦大学佐倉看護専門学校創立20周年記念祝賀会  
【オークラ千葉ホテル 11:00(予定)】

10 月

- 7日(日)広瀬美紀子ピアノリサイタル  
ベートーヴェンピアノソナタ第17番「テンペスト」・  
ピアソラ(北條直彦編曲)「孤独」他  
【王子ホール(銀座) 14:00 開演 3,500円】  
9日(火)定例理事会【日本音楽舞踊会議事務所 19:00~】  
15日(月)「様々な音の風景Ⅹ」~20世紀以降の音楽とその潮流~  
【すみだトリフォニー小ホール】詳細未定

11 月

- 7日(水)定例理事会【日本音楽舞踊会議事務所 19:00~】  
18日(日)若い翼によるCMDJコンサート5【すみだトリフォニー小ホール】  
(詳細未定)  
19日(月)深沢亮子 「翔の会」公開レッスン  
【10:00 コトブキ D. Iセンター 問い合わせ:大山喬子】

12 月

4日(火) 深沢亮子とその仲間による “ピアノと室内楽の夕べ”

深沢亮子 (Pf.) 恵藤久美子 (Vln.) 安田謙一郎 (Vc.)

モーツァルト：ピアノソナタ No. 10 C-Dur K. 330

ブラームス：ピアノとヴァイオリンのためのソナタ No. 1 G-Dur

助川敏弥：Sunset for Violincello and Piano (2011年／初演)

モーツァルト：ピアノトリオ No. 5 K. 542 A-Dur

【音楽の友ホール 17：00 開演 入場料 4,500 円 (会員割引あり)】

7日(金) 定例理事会【日本音楽舞踊会議事務所 19:00～】

15日(土) 室内楽コンサート シューマン、ドヴォルザーク ピアノ 5 重奏曲

Pf. 深沢亮子 Vn. 掛橋佑水、井上静香 Va. 中村静香 Vc. 宮坂拓志

主催 (財) 藤沢市芸術文化振興財団

【湘南台文化センター市民シアター 16：00 (予定) 問い合わせ：

0466-28-1135】

2013 年

1 月

7日(土) 日本音楽舞踊会議 新年会【詳細未定】

25日(金) 声楽部会主催公演【すみだトリフォニー小ホール・詳細未定】

27日(日) 深沢亮子 東金文化会館創立 25 周年記念コンサート

ソロと室内楽 共演：Va. 中村静香、Vc. 上村文乃

【問い合わせ：東金文化会館 0475-55-6211】

2 月

7日(木) 定例理事会【日本音楽舞踊会議事務所 19:00～】

18日(月) 動き、舞踊、所作と音楽Ⅱ

【すみだトリフォニー小ホール 詳細「未定」】

会員・賛助会員の皆様へ「スケジュール」へのお知らせとお願い

○上記スケジュール記載の本会主催事業 (ゴシック文字) には、会員・賛助会員・CMDJ 友の会の方は会員証呈示で無料、または会員割引料金でご入場頂けます。

○毎号掲載されるこの欄に会員の皆様の活動予定を無料掲載させて頂きます。演奏会に限らず、出版、講演等も「音楽の世界・会と会員のスケジュール欄掲載希望」として日本音楽舞踊会議事務所までメールまたは Fax でお知らせ下さい。

○お知らせの際は、①〇月〇日 (曜日) ②会員名 ③催し物 (出版物) 名④メインプログラム一曲、もしくはメイン公演・講演内容を一つ ⑤【開催場所、開演時間、チケット価格、等】の順番でお書きください。

## 編集後記

東日本大震災から1年を経て、やっとの復興への道を歩み始めたばかりの我が国ですが、本会の音楽活動はめざましく活性化し、先月は、音楽と舞踊などのパフォーマンスのコラボレーションによる『動き、動作、所作と音楽』と、エレクトーンオーケストラによる『コンチェルトと歌曲の夕べ』という2つのユニークなコンサートが開催され、お客様から高い評価を受けました。また、本会会員の広瀬美紀子さんたちが中心になって立ち上げた「福島原発被災者チャリティーコンサート」が開催されましたが、大ホールに満員の聴衆が来場し、この問題に対する人々の関心の高さを改めて認識しました。今月13日には、今年で第10回を迎えるフレッシュコンサートが開催されます。会員、読者の皆様はどうか足を運んで、これから巣立ちする若い音楽家達の熱演に耳を傾けてやってください。そして若い人達に勇気を与えるだけでなく、我々も元気を分けてもらおうではありませんか。(編集長：中島洋一)

### 本誌は次のところでお取り次ぎしています

北海道	ヤマハ・ミュージック札幌店	011-512-1726
福島	福島大学生協	024-548-0091
千葉	紀伊国屋書店千葉営業所	043-296-0188
東京	オリオン書房外商部	042-529-2311
	(株)紀伊国屋書店 和雑誌アクセスセンター	03-3354-0131
	アカデミア・ミュージック(株)	03-3813-6751
	全国学生生協連合会図書サービス	03-3382-3891
	早稲田大学生協ブックセンター	03-3202-3236
神奈川	昭和音楽大学購買店	046-245-8100
静岡	吉見書店	054-252-0157
愛知	正文館書店外商部	052-931-9321
	マコト書店	052-501-0063
大阪	(株)ヤマミュージック大阪心斎橋店	06-211-8331
	ユーゴー書店	06-623-2341
兵庫	(株)ジュンク堂書店 外商部	078-262-7794
京都	龍谷大学生協書籍部	075-642-0103
沖縄	沖縄教販(株)	098-868-4170

---

編集長：中島洋一 副編集長：橘川 琢

編集部員：新井知子 浦 富美 大久保靖子 栗栖麻衣子 高島和義 高橋 通 高橋雅光  
戸引小夜子 北條直彦 湯浅玲子

---

### 音楽の世界4月号(通巻538号)

2012年4月1日発行 定価500円(本体476円)

発行人：芙二 三枝子

編集・発行所 日本音楽舞踊会議 The CONFERENCE of MUSIC and DANCE JAPAN

〒169-0075 東京都新宿区高田馬場4-1-6 寿美ビル305 Tel/Fax:(03)3369 7496

HP: <http://www5c.biglobe.ne.jp/~onbukai/> E-mail: [onbukai@mua.biglobe.ne.jp](mailto:onbukai@mua.biglobe.ne.jp)

A/D: 音楽の世界編集部 Tel: (03)3369 7496 印刷: イゲタ印刷(株) Tel: (04)7185 0471

購読料 年間: 5000円 (6ヶ月: 2500円) 振替 00110-4-65140 (日本音楽舞踊会議)

\* 日本音楽舞踊会議会員会費の中に、購読料が含まれております

\* 乱丁、落丁がございましたらお取替えします